
無期限の標的

赤いからす

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

無期限の標的

【Nコード】

N5348C

【作者名】

赤いからす

【あらすじ】

殿森理はある男に脅迫され、文明から隔離された山の中へ連れて行かされた。そして、深い森に身を潜めるように建っている屋敷に住む青年を殺せと男に強要されてしまう。期限はなぜか無期限だった。

一日目 囚われの身

「おい、早くついて来い！」

20メートル距離がひらいただけで怒られた。寂しい山道に野太い男の声がこだまする。

「わかったよ」

おれは感情を抑え、小走りで距離を詰める。

不満は色々ある。身長が185センチ以上あって頭頂部がハゲあがり、もみあげが異常に長く眉毛が濃い男性ホルモン丸出しの男の後ろを付いて歩かないといけないこと、右手には黒のボストンバッグ、背中に寝袋を背負わされ、目的も知らされていないのだ。

「まだ、歩くのか？」

質問が許されるとは思わなかったが、取り敢えず訊いてみた。どんな仕打ちをされるのかは覚悟の上。黙っているのがしゃくだった。

「これからが本番さ」

禿頭の男は楽しそうに笑って振り向く。

まもなくすると街灯の本数は極端に減るばかりか、貧相な笠を頭にのせた裸電球に切り替わり夜には頼りない光をこぼすことだろう。道路も二車線から一車線へ。長時間餌にありつけない蛇のように道は細くなり、とうとう街灯もなくなった。文明から隔絶された山奥の風景が出迎え、風に揺れて枝を擦らせた木々の音が2人の男の侵入を拒もうと相談している囁き声に聞こえた。

「こつちだ」

複雑なカーブを描く道に差し掛かると男が舗装されていない砂利

の林道へと進路を変えた。石がゴロゴロしていて足首を挫きそうになる。

（そうか、この道に車は入れない。だからあんなところで車を乗り捨てたんだな）

なぜ、しんどい山道を歩くのかという理由がわかっただけでストレスの要素がひとつだけ解消された。

朝早く出発した長時間のドライブはある山の麓にある駐車場で終焉を迎えた。山登りをする老人グループのマイクロバスが一台停まっていたが、薄いグリーンの作業服を着ていた2人の姿は『森林を管理する人』程度としか映らず“おはようございます”と挨拶されてしまった。禿頭は「登山コースをはずれないようにね、おばあちゃん」と気さくに声をかけてその場を簡単に乗り切った。

おれたちは登山コースと違う一般道を歩いて山を登った。駐車場から3キロ進むと『これより先、私有地につき立入禁止』という看板と鉄条網が行く手を阻んだ。ただ、杭が傾き、鉄条網は錆びて指先の力だけで切れてしまった。強制的に立ち入りを拒否しているはいえなかった。麓の駐車場から林道に入るまで車の往来や人の姿はない。

禿頭の足が止まり、林道脇を注意深く見ている。しばらくすると黄色い石を見つけ、草木を掻き分けて深い竹藪の中へ入っていく。おれもあとに続いた。石はペンキで塗られたもの。禿頭が事前に用意したものだろう。

「おい、逃げるなよ」

禿頭が時々点呼代わりに声をかけてきた。笹藪が壁となって視界を遮り、おれの姿が見えにくいためだ。手を繋いで歩くわけにもい

くまい。

「わかつてる」

逃げられないのをわかつていて訊いてくるんだから性格が悪い。^{たち}

笹藪を抜けると葉を上部だけ茂らせた背の高い木が延々と続く林に辿り着き、見通しがよくなった。禿頭は首からぶら下げていた双眼鏡で周りを見渡し、ポケットから出した地図と方位磁石を見比べ、て進路を若干修正した。

太陽が真上に差し掛かると木にびっしりとコケが生え、小川が流れる森へと足を踏み入れた。禿頭が平らな石の上に腰を下ろしたのでおれも休むことにした。木と葉が太陽の日差しを隠し、涼むにはちょうどよかった。休憩中、禿頭とは口もきかず、目も合わせなかった。

おれを殺すためにこんな所まで連れてきたのだろうか？いままで、そんなチャンスはいくらでもあった。殺す気があるのならとつくに殺^やっているはず。けれど歩くときは禿頭に背中を向けてはいけない。

禿頭が無言で立ち上がり休憩の終了が間接的に伝わると、太陽が山の峰に隠れるまで歩かされた。森と別れ、木の数が減って雑草の高さが膝までくらいの見晴らしの良い場所で久し振りに禿頭が口を開いた。

「とまれ」

その声で自分が立っているところがなだらかな斜面の崖の上ということに気づかされた。道具がなくても慎重に足場を確保すれば下りられるが、崖はビルの3階くらいの高さでありそうで後ろから突き落とされると大怪我してしまいそうだ。

「あれを見る」

禿頭が身を屈めながら斜め下を指差した。

その方向には大きな屋敷があつた。崖からやや離れた谷底に張り付く格好で奇妙な風体をして深い森に身を潜めるように建っている。一体何階建てなのか実の設計者でも説明に苦慮するだろう。

禿頭から双眼鏡を渡され、じっくり観察した。車の轍と思われる土色の二本の線が建物まで伸びていた。瓦葺の屋根は周りの木々に溶け込むデザインで迷彩を意識した淡い緑色。趣味が悪いのはそれくらいで他は気品に満ち溢れ、正面玄関を飾る車寄せの階上^{つえ}に張り出したバルコニーのX字形の欄干は古さを醸し出す木造にこだわった外観で伝統ある純和風建築のお寺を匂わせる。お金持ちがあまり余った財産を持って余して造ったともいえるし、著名な建築家が不安定な精神状態で妄想と欲求のままに建ててしまった代物だともいえる。

「誰かの別荘なのかな？」

「昔はホテルだったそうだ。増築を繰り返して内部は複雑な構造になっている。建物自体の広さはわからないが、敷地面積はこの辺りの山全部で100万平方メートルある」

「イメージがわからない」

「東京ドーム21個分だ」

禿頭が答えてからおれはしばらく黙った。なんのためにここまで連れてきたのか見当もつかない。

禿頭が作業服の胸ポケットから2L判の写真を取り出した。最初は二枚持っていたが、一瞥して鼻でフンと笑ってから一枚を再びポケットに戻してもう一枚をおれに渡した。写真には紺色のスーツを着た利発そうな青年が正面を向いて上半身だけ写っている。細い目、

適度な高さの鼻、薄い唇、これと違って目立つところがないものの各パーツが主張していないため品の良さを感じるが、頬がこけて痩せすぎの印象は否めない。背景が真っ白で証明写真を引き伸ばしたものなのか粒子が粗い。運転免許証の写真など間の抜けた顔で写ってしまうことはあるが、青年は無表情で瞳はとても寂しそうに思えた。

「この青年がどうかしたのか？」

質問したがある程度返ってくる答えはわかっていた。

「始末してもらおう」

禿頭は想像通りの答えを口にした。

「おれに人殺しをさせるのか」

「はじめて人を殺すような口の利き方じゃないか」

禿頭が薄く笑った。おれは見えないように握り拳をつくった。

「あそこには写真の青年が住んでいる。屋敷から滅多に外に出ることがないから狙えるチャンスは少ない。窓際に姿が見えたら撃てるかもしれないが初心者には難しいだろうな」

禿頭はおれから屋敷へと視線を移す。

「できるわけがない。断る！」

おれは拒否するというより拒絶した。

「いいか、おれたちは青年を殺せと強制はしない。あくまで契約をしたいだけで、それを破棄するか遂行するかはおまえが決めることだ」

「本気で青年を殺したいと思っているならプロのあんたが始末すればいいだろう」

不貞腐れ気味に言ってやった。

「それができれば苦労しない」

「どういう意味だ？」

「青年は悪魔なんだよ」

「あ、悪魔？」

耳を疑い、聞き返す。

「なんでもその青年は生まれたときからあの屋敷に住んでいて、学校に行かず、親から書庫にある本の知識だけを植え付けられて育てられたそう。狭い部屋に閉じ込められて暮らしていると人間がどうなるかわかるか？」

おれは黙って首を横に振った。

「凶暴な殺人鬼になるそう」

「どうして？」

「他人と接したことがないから会話がかみ合わず、ケンカになり、加減を知らないものだから相手が動かなくなるまで痛めつけてしまっ」

「この写真の青年がそんなことをするようには見えないが……誰か人を殺したのか？」

おれは写真を見詰めてから上目遣いで探るように尋ねた。

「噂は山ほどある。まだ屋敷がホテルだった時代に宿泊客を惨殺したとか、親や兄弟を殺したとか、噂話は尽きない」

「その話を信じるといえるのか？おれが知るかぎりこの近辺で人が殺されたというニュースを聞いたことがないし、それに警察が黙っているわけがない」

「死体が発見されなかったから。ただ行方不明者がこの辺で多数

出ているのは事実だ。正義のための人殺しと思えば気が楽だろ」
「だから、おまえたちが始末すればすむことじゃないか」
おれは苛立ちを抑えながら再び拒否した。

「先週、有能な人材を送ったが、行方が掴めなくなった」

「警察に搜索願を出せよ」

「おまえは馬鹿か！殺し屋の搜索願を出す奴がどこにいるんだ」
もつともな意見だった。

「素人のおれに殺^やれるわけないだろ」

「おまえが死ぬか行方不明になれば屋敷を爆破する」

真つ当な意見を言っても禿頭は聞き入れるどころか、おれが失敗したときのことをすでに考えている。

「おれが成功しようが失敗しようがおまえたちには関係ないということか……」

呟くように言った。おれは実験的に雇われたようなもの。

「おまえの頑張りしだいだ」

「励まし、ありがとう」

「持ってきた荷物をおろせ」

おれは飾り気のない黒いボストンバッグを置いてファスナーを開けた。禿頭が白い繭のような形をした緩衝材に手を突っ込みステンレス鋼製の黒くて平たい塊やパイプ状のものを取り出す。

「組み立てはサービスだ」

禿頭は慣れた手付きでバラバラだった銃を繋ぎ合わせていく。弾が入ったマガジンとスコープ、銃身の先端に消音器を取り付け、トリガー後部の横溝を切ったボタンを押すと自慢げに言った。

「こつやってセーフティを解除するんだ」

禿頭はスナイパーライフルを持ち上げ、屋敷の逆方向に構えた。プシューと空気が抜ける音がした。どこを狙ったのかわからないが、音がしないから物理的なものを狙ったわけではないらしい。

「撃ち終わったら、セーフティ右横のハンドルを手前に引つ張って薬莖を出す。ハンドルを離せばチェンバーに弾が送り込まれる。あとはトリガーを引けば撃てる。簡単だろ」

禿頭がハンドルを操作するとガシャガシャと音がして薬莖がチェンバーから弾き出された。

「持ってみろ。4000ドルする高級品だ、丁寧に扱え」
値段ほど重量感はなかった。

「重さは6キロくらい。有効射程距離は1・4キロ、マガジンには5発入ってるが、いま撃ったから残りは4発。1発で仕留めないとまずいだろうな。すぐに警戒態勢をひかれるだろう。接近戦がお好みならそこにリボルバーも用意してある」

バッグを覗くと銀色輝く38口径のリボルバーが取り残されていた。

「屋敷に青年以外誰かいるのか？」

「世話をしてくれる執事のような存在の老人がいる。どちらにしても持久戦になる覚悟はしておけ。寝袋はあるし、食料はおれが定期的に様子を見に来たときに持ってきてやる。念のためにこれも渡しておく」

禿頭は地面に置いてある寝袋の上に小冊子をパサツと投げた。「野山の食べられる草と食べられない草」という表紙のハンドブックがこれからやる仕事の厳しさを象徴している気がした。

「写真つきだからわかりやすいだろ。飲み水は休憩した小川を使えばいいさ。腹を壊しても責任はもたないがな」
禿頭がニヤニヤしながら言った。

ライフルで大きな風穴を開けてやるうかと思ったが、禿頭には隙がない。腰とズボンの間に銃を差し込んでいるのを車から降りるときに見たし、常に手を後ろに回して素早く撃てるようにトリガーの位置を気にしている。早撃ちで敵う相手じゃない。坂道を登るときにも足首に忍ばせているナイフがチラリと確認できた。抜け目がない。それにおれには禿頭を殺してはいけないという足枷がある。自由を奪えることができれば話は別だが……。

「ところで期限は？」

おれは肝心なことを尋ねた。

「無期限だ。おまえが仕事を早く片付けたければ今からでも屋敷に突撃すればいい」

「安易に突っ込めるわけないだろ」

「心配するな。おまえが死ぬまで人質の命は保障する」

「頼む！携帯で声を聞かせてくれ！」

「ここでは電波が通じない」

「生きてる証拠を見せてくれ！」

禿頭がニヤツと笑ってから胸ポケットに手を入れて写真を宙に放り、空気抵抗を受けながらヒラヒラ落ちた。さっき二枚取り出したうちの残った一枚だ。

おれはライフルを地面に置いて写真を拾った。写真には赤い布で目隠しされた女性と女の子が寄り添って写っている。

「安心したか？」

禿頭に訊かれても返事することも頷くこともできない。

「写真は返してもらおうぞ」

禿頭が手を差し出し出してくる。おれは青年が写っている写真を渡そうとした。

「ふざけんじゃねえ！」

禿頭は手の甲で写真を弾き飛ばした。

「おれが家族の写真を持つていても問題ないだろ」

「いいや、駄目だ。主人公が写真を穴が開くくらい見て人質が監禁されている場所のヒントを掴むなんてことがよく映画でもあるからな」

禿頭が腰に手を回して銃を抜き取った。おれが想像していたよりも早い動きだ。ライフルを置き、両手を上げて降参した。写真が地面に落ちた。自分の家族を見放したような気持ちになった。

禿頭は写真を拾い上げ、無造作に胸ポケットに突っ込み、釘を刺した。

「何度も言うが、早く助けなければ屋敷に居る青年をさっさと始末するんだな。毎日様子を見に来るからな」

そう言っつて禿頭は帰った。後ろ姿を見たとき、少し両肩が揺れていた。笑っていたのだらう。おれに始末できるわけがないとせせら笑い面白がっている。

ボツィとしてる暇はない。おれはうつ伏せになってライフルのスコップを覗いた。やる気に反して視界がぼやけていたために初動で躓いた。ダイヤルを回しながら標準を調整していく。10倍よりやや手前で焦点があった。屋敷の隅々を確認したが人影はない。窓際

に誰か立ってないか目を凝らしても人の形をした影すらガラス窓から見つけることができなかった。

動けない……目を離れた際に青年がひょっこり窓から顔を出すかもしれない。それが最初で最後のチャンスになってしまいかもしれないのだ。

映画で観るより地味な仕事だと数分でスナイパーの負の部分を感じてしまった。

でも、このまま青年を殺してしまっていていいものだろうか？殺せたとして、妻と子供を黙って帰してくれるとは思えないが、世の中で一番信用できない人物を信用しなければいけないほどおれの立場は弱い。

昨日からおれの人生は一転した。

「おい、弁当は？」

「いつものところよ」

おれは返ってくる答えがわかっていて妻に訊き、その答えを耳で受け止めると満足しながら玄関で靴を履く。妻は下駄箱の上に弁当を置くことを習慣にした。おれが時々弁当を忘れてしまうので出掛けるときに目に付きやすい下駄箱の上に置くことに決めたらしい。

チェック柄の巾着袋を触るとまだ温かった。鞆の取っ手に弁当が入っている巾着袋の紐を結び「いつてきます」と声をかけると妻と娘が居間から顔を出して「いつてらっしゃい」と手を振るのがいつもの出勤風景。

16分歩くと駅があり電車に乗る。いつもなら最寄り駅で降りて会社に向かうのだが、その日はひとつ手前の駅で電車を降りた。携

帯で会社に電話して遅刻すると連絡を入れておく。

本物の銃がほしい……。

ふと思った。夕食を食べているとき箸がとまり、そんな気持ちが生じた。強盗に入られた家族の父親が銃で犯人を撃ち殺したというニュースを見たからかもしれない。なかなか眠れなかった。

布団から飛び出して押入れを開け、唯一のコレクションといえるモデルガン眺めた。小型の22口径、45口径のコルト、357マグナム、合わせて3丁が買ったままの箱におさまっている。どれもハンドガンタイプ。数でいえば趣味の域に達していない。銃を構えてアクション俳優を気取るなんてこともしない。なぜおまえたちはここに居るんだと問いかけたくもなる。だからといって捨てることもできない。

日本がアメリカの51番目の州になってから安心感が必要になった。国の借金で破綻した日本はアメリカの州になることを決断した。保守的で極端な思想をもつ活動家たちが暴動を起こして国会を燃やして大変な騒ぎにもなった。

1958年に制定され、銃規制を厳しくコントロールしてきた銃砲刀剣類所持等取締法、略して銃刀法が大幅に緩和されてコンビニで銃が買えるようになった。全米ライフル安全協会の支援を受けている大統領の鶴の一声だった。

「日本州の住民に安全を提供するのは私の役目です！」

日本州の知事であり女性ではじめて行政のトップになった元首相は猛反対する世論の声を押し切り大統領を支持した。支持したこと知事の座を獲得した。若者たちはマイケル、トム、ケリー、ジェニファーなどアメリカ人風の名前をつけることが流行っている。隣

国からは『日本人はバナナになった』と揶揄された。外見は黄色い皮を被ったアジア人なのに中身は白いアメリカ人になったということを書いてほしい。

高齢化が進んでいた日本にアメリカの他民族な人口がプラスされて税金面の負担はいくらか楽になっているとアメリカ政府は自負するが実感はない。アメリカ軍の基地が増え、日本州の各地で軍人の不祥事が起きるようになった。治安が悪くなった。アメリカ発の新しい形の犯罪は5年後に日本でも起きるといわれてきたが、その時間が縮まった。短絡的な犯罪を起こしてCNNに映ることが犯罪者のステータスになっている。

自分の身は自分で守るべきだと合言葉のように各マスコミから発信され、世間も同調する意見が多くなった。強盗に襲われた家族のニュースもそうだが、護身用に銃を持たなければ家族を守れない時代になった。押入れのモデルガンは有効な武器とはいえない。

おれには本物の銃が必要だった。

写真付きの身分証明証を提示するだけで銃を購入できるのは『イエスタデイ』という外資系のコンビニだけで家の近所にはない。会社帰りに買ってもよかったが、銃を隠し持って街を闊歩したいと気が逸^はつてしまった。

それがいけなかった。

頭に記憶していた住所の交差点角にガラス張りの『イエスタデイ』が存在した。6階建ての商業ビルで2階より上は壁から縦長に突き出た看板を見ると英会話の教室やらエステサロンなどのテナントで埋まっていた。両開きの自動ドアには『銃の購入はイエスタデイで

「店員にお気軽にご相談ください」のポスターが貼られていたが、屋上の広告看板には『銃は殺しを連鎖させるだけ!』とスローガンめいたものを掲げている。右下に小さな字で青年平和維新協会とやら法人らしき名を控えめに宣伝している。銃規制に関して一部の団体から反発があるのも事実。ただし世の中の流れとして屋上の宣伝は無駄な投資に思える。

朝食を食べ損ねたサラリーマンやOLがレジに並んでいた。店の奥のジュース類や冷凍食品が陳列されているガラスケースのところまで列が伸びていた。入口右手の雑誌コーナーを素通りして最後尾で順番を待った。

レジ担当の若い娘は意外と手際がよくて次々と客の数をこなしていく。スナック菓子とカップラーメンの棚の間にできていた列が半分くらいになったとき、奴が入ってきた。両サイドを残して頭が禿げて大阪で師匠と呼ばれてもおかしくないお笑い芸人風の顔をしているのに背筋を伸ばした姿勢の良い歩き方と長身のせいなのか着ている黒のロングコートが似合っていた。革靴の踵を規則正しくコツコツと鳴らしておれの後ろについた。

男はなにも買っていない。コートのポケットに両手をつっ込んだまま並んだ。レジ横のおでんを注文する風貌ではないので『イエスタデイ』に來た目的はおれと同じかもしれないと思った。銃を買う仲間がいて安心感さえそのときは芽生えた。

おれの前に並んでいたサラリーマンがスポーツ新聞を買って、やっと順番が回ってきた。

「銃を買いたいんだけど」

「写真付きの証明証はお持ちですか?」

赤い上つ張りを着た店員はおれが運転免許証を提示するとレジ・カウンターの上一枚の用紙とボールペンを置いた。

「太線で囲んでいるところを記入してください」

住所、氏名、電話番号、5種類ある銃のうちひとつに丸で印をつけ、一度に購入できる銃は一丁、実弾は二箱までという注意事項に同意のサインを求める書類だった。

記入しようとするすると背中に圧迫してくる空気を感じた。後ろに並んでいる禿頭がピツタリと体を近づけて肩口に鼻息を吹きかけてきたからだ。

（変態か？関わらないほうが身の為だな）

自分に言い聞かせるようにして用紙に記入することに集中した。書き終わると店員はカウンター裏側の金庫のテンキーに暗証番号を打ち込んで扉を開けた。

「これでよろしいですか？」

黒光りする28口径のリボルバーと実弾が入った箱を見せられ、おれは頷いた。アメリカらしい隙間だらけの手続きが終了して支払いはカードで済ませた。

『イエスタデイ』を出るとき、いつのまにか後ろに並んでいた禿頭がいなくなっていることに気づいた。

まあ、いいか……と思いつながら店を出た。

駅に着いて改札口に向かった。ひと時のラッシュが過ぎ去って利用客の数は疎ら。

「おい、動くな」

低い声が耳元に響くと背中に硬いものが当たった。

おれが振り向こうとすると……。

「そのままコインロッカーのコーナーまで歩け。妙な真似をすれば後ろから銃で撃つ。わかつたら頷いてくれるかな、殿森理さん」

どうしておれなのか。何が目的なのか。叫んだら駅員が飛んできてくれるかもしれないが、おれが撃たれるより先に迅速な方法で対処してくれる腕利きの駅員がいるとは思えない。それにおれの名前を知っているということは圧倒的にこちらが不利だった。しかも、後ろにいる男が次ぎに言った一言がおれの自由を完全に奪った。

「大人しくしていれば家族に危害を加えたりしない」

おれは駅の隅に設置されているコインロッカーのコーナーまで背中を突かれながら誘導された。その途中、男同士が寄り添って歩いている姿を不審に思ったのか20代後半のサラリーマンが凝視してこっちにやってくる。おれは“助けてくれ”と目から光線を送ったが、二、三步横に距離をあけてすれ違っていつてしまった。

コインロッカーのコーナーは3台並んでいる自動販売機の裏側にあるので周りからの目を完全に遮断していた。

「よし、良い子だ。手をゆっくり上にあげろ」

指示されたとおりにすると男はおれの腰を手で弄た。さつきすれ違ったサラリーマンに見られたら、やっぱりそうかと思われてしま

う。

「素人が持ち歩いてちゃいけないなあ」

銃を取り上げられ、馬鹿にされるような言い方をされた以上にシヨックなのは後ろの男が『イエスタデイ』でおれが銃を買ったことを知っていたことだった。見ていたに違いない。そうでなければいきなり腰を触ったりしない。いつから尾行られていたのかまったくわからなかった。

「銃は興味本位で買うものじゃないぜ」

「か、家族を守るために買ったんだ」

小さな声で反論した。

「そうか、ちょっと待ってる」

後ろにいる男が背中から銃を離した。携帯電話で誰かと会話をはじめた。

「わかった」

と言つて携帯を閉じる音がした。

「これから仕事をしてもらう。ゆっくりこつちを向け」

振り向いて驚いた。『イエスタデイ』でおれの後ろに並んでいた禿頭だった。

「いいか、これからあそこのトイレに入る奴を殺せ。心配するな。サイレンサー付きの銃を貸してやるから逃げる時間は十分に稼げる」

斜め向かいに駅のトイレがあった。“これからあそこのトイレに入る奴”ということは無差別に人を殺せということなのだろうか？

「できない」

声が震えるまえに短い言葉で反抗した。

「おまえに断る権利はない」

禿頭は携帯の液晶パネルを見せた。画面にはおれの妻と娘が車の後部座席に押し込まれている場面が映し出されていた。

「コンビニでおまえの運転免許証を見た。仲間にもすぐ連絡して拉致した」

禿頭が唇の口角をせり上がらせて卑しく笑った。

『イエスタデイ』から駅まで歩いて15分たらず。その間に免許証の住所から家を見つけ、2人をさらう芸当ができるなんてどんな組織なのか？想像するだけで寒気がした。

「どうすればいい?」

「覚悟を決めればいいだけだ」

禿頭は携帯をポケットに仕舞うとおれの背後に回った。

「よし、男が一人でトイレに入った。いいか少しでも妙な真似をすれば奥さんと子供の命はない。トイレに入ったらおれの持っている銃を渡すから早く撃て」

禿頭は早口で捲くし立てると、銃口でおれの背中を小突いた。

「トリガーを引けば弾が出るようにセットしてやる」

トイレに入るまでの短い時間、禿頭から簡単な説明を受けた。トイレには白髪でくたびれた背広を着た初老の男性が小便器の前に立っていた。禿頭がおれに銃を握らせる。

「撃て!」

小声で指示されると両手で銃を構え、背後から見知らぬ男性を容赦なく撃った。

灰色の背広が黒く染まり、ズルズルと小便器に寄りかかるように初老の男性は倒れていく。背後でカシャと音がした。

携帯で殺しの現場を撮影し、銃をむしり取ると禿頭は茫然としているおれの襟首を掴んだ。

「付いてこい」

妻と子供を人質に獲られてしまっではなすがまま。

「肝っ玉の大きさは合格だ」

その後、黒い車に乗せられ、目隠しをされてずっとドライブに付き合わされた。

麓の手前で作業服に着替え、安全靴を履き、森林を管理する人に

変装させられてここまで連れてこられた。

おれは銃を買ったことを後悔していた。

陽が沈み、辺りが薄暗くなった。そろそろ一日目の仕事の引き際が迫っていた。屋敷にはなんの動きもない。人の出入りもない。暗視スコープでもあれば別だが、真っ黒いスクリーンが下りてしまうと夜通しの監視は不可能だ。

「はあ〜」

役に立たないスコープから目を離し、ため息をもらした。妻と娘を助け出せる確率はどのくらいあるのか……ライフルで青年を狙撃できる確率、成功してもあの禿頭が妻と娘を返してくれる確率はもっと低いだろう。

(1パーセントもないな……)

絶望的な数字が弾き出されるとまたため息が出た。自分を慰めるために空を見た。星ひとつの光源でさえ見つけることが難しく、真っ暗な闇が覆っている。原因を作っているのは上空に居座っている分厚い雲。空から崖上までの距離が縮まっている気がして圧迫感が集中力を切らそうとする。

寝袋で寝る前にもう少しがんばろうと気合いを入れなおし、再度スコープに目を当てる。

だが、暗くなっても屋敷から灯かりがもれているところがない。

(本当に青年が住んでいるのか?とんだ茶番に付き合されているんじゃないだろうか?)

今日の仕事を諦めかけたそのとき、屋敷の煙突から何かが出てき

て上へ上へのぼって闇と同化していることに気づいた。

（煙だ！）

ということとは誰かが屋敷に居ることは間違いなさそうだ。崖を下りて屋敷に踏み込むことも考えたが、安易に動くのは危険すぎる。青年をはつきりとこの目で捉えるまでは我慢するべきだ。時間は…無期限なのだから。初日に収穫があっただけよしとしなければ。

煙をずっと見ていた。温暖化、9月とはいえさすがに太陽が沈んでいる夜の山は寒い。吐く息が白く、底冷えがしてなかなか眠れないのは不幸中の幸いと思わないといけない。青年の姿を見つけるまでは不眠不休の覚悟をしないとけない。

無期限の標的

二日目 屋敷に住む二人

目を閉じた記憶はなかった。眠ったという意識も希薄で、目が覚めたとき、辺りは真っ白。一瞬、天国に居るのかと勘違いした。でも、卑劣で卑怯な脅迫をされたとはいえ人殺しをした自分に神様から温情を受けて“天国へようこそ！”などと声をかけられるわけがない。どんな理由があろうとも人を殺めてしまえば地獄に墮とされるだろう。しかもおれは見ず知らずの人を恨みもないのに殺してしまった。

“殺すんだ！”と明確に心が作用したわけじゃない。「撃て！」という禿頭の声に反応してトリガーを引いてしまった。飲酒運転で人を轢いた奴よりも罪は軽いはず。通り魔殺人、計画的なプロによる殺人として世間ではあれやこれやと憶測を呼んでいる頃だろう。禿頭は携帯で写した画像を報道機関や警察に流しているかもしれない。極悪非道な犯罪者として顔が知れ渡っていることだって考えられる。あの初老の男性にも家族はいるはずで、おれは自分の家族と引き換えにあの男性の命を奪った。いまになって後悔という重い石が肩にのしかかってきた。

上半身を起こした。地獄よりマシ、天国より不愉快な世界は頼にしっかりとした冷たい感覚を伝え、生きていることを教えてくれた。霧の冷たさは気持ちに冷静さをもたらした。

ライフルを設置している地点から半径1メートル付近まで見えるが、霧は屋敷までの視界を完全に閉ざしてしまっている。

（晴れるだろうか？陽が昇ればきっと晴れる！）
そう思いながらじっと待つ。

真っ白い空に太陽を中心とした光の輪が輝きを強調させはじめると、屋敷の輪郭がぼんやりと浮かんできた。スコープで覗いた。白濁した夢の中に存在するお化け屋敷におれには見えた。

様子を探る程度なら近づいても大丈夫だろう。こっちが見えないのだから相手も見えないはず。

38口径のリボルバーをバツクから出して腰とズボンのあいだに差し込み、お尻から滑りながら崖を下りた。ズボンは野球選手がベースに滑り込んだように汚れてしまった。

冷たい空気は重いらしく崖の下の方へ行くに従って霧が濃くなっていた。白くて大きな壁が立ちはだかる。屋敷までの地面は柔らかく、粘土質の土に足をとられながらも姿勢を低くして慎重に歩を進めた。

(まだか?)

距離感が掴めず、たち込める霧の中を手で掻き分ける。そして、物理的な白い壁に指先が触れた。

目の前で見て改めてわかったことがある。屋敷の壁は白で統一されているのだが、漆喰、コンクリート、大理石など様々な材料を駆使している。ひび割れ、変色、痛んでいるところを修繕した跡がない。手で触ると漆喰部分の壁がぼろぼろ剥がれ落ちて相当古い建物だということを実証した。

窓が等間隔に並んでいる。屋敷右隅の窓から部屋を覗いた。ベッド、テーブル、ドレッサー、クローゼットなどクラシカルな家具が揃えられている。昔、ホテルだった名残りを感じさせる。荒らされている様子はなく、よからぬ侵入者の手によって落書きや破壊され

た形跡がないのは救いだ。

(入ってみようかな……)
幼い頃の好奇心が蘇った。

ガラスを割って入ると音やガラス片などから侵入したことを知らせてしまう恐れがある。開けられる窓がないかひとつひとつチェックしたが努力は実らない。最終的に正面玄関までの右側全部の八つの窓には鍵がかかっていた。

窓から中を覗いている姿を見られてしまうよりも正面から堂々と入ったほうが怪しまれないのかもしれない。

車寄せはところどころ雑草が生えている。それを避けながら正面玄関へ。せっかく固いコンクリートを突き破って外の世界に飛び出してきたのに踏み潰してしまうのはなんとなくかわいそうな気がした。爪先立ちで移動した。けれどこれから人を殺そうとしている男がこんなことでいいのかとも思う。

結局おれは雑草を踏みながらインターホンらしきものを探した。でも、見つからない。

コンコンとノックしてみる。

返答がない。

音が小さすぎたか……。

今度はドンドンと力強くドアを叩いた。

だが、返答がない。

「すいませ〜ん」

語尾を伸ばしてわざと無抵抗な存在をアピールしたが、やっぱり返答がない。

ドアレバーを引いた。かなり重量感のあるドアで両手と腰を使いやっとな体をに入れるだけの隙間を確保できることができた。窓には鍵をかけて正面玄関には鍵をかけていないらしい。ドアレバーに手垢や埃の不快感な手触り感がない。掃除が行き届いている。

(やっぱり誰がいる)

屋敷の内部は中世ヨーロッパ風で玄関ホール正面の大階段の踊り場には天女が細工されたステンドグラスの窓、床は大理石、真っ赤な牡丹の花をあしらった漆喰の天井からはシャンデリアがぶら下がりがリリシャ様式のどっしりとした石柱が並んで支え、調度品や絵画までも西洋風にまとめている。現代的な代物はなく、どれも古いものだ。壁紙や絨毯のデザインはつる草が複雑に絡んでこれといった規則性なく縦横無尽に走り回り、黒ずんだ茶色の濃淡だけで表現されている。屋敷内の空気はそれらの色素を吸い取ってセピア色に淀んでいる気がした。

一階の正面玄関を中心に右左に通路が伸び、真正面の大階段はさつき下りてきた崖の傾斜とそんな色なくらい急な造りでホテル向きじゃない。想像していたよりも広く、大階段の奥の通路はどこまで続いているのか想像がつかない。

ドアレバーから手を離れた。閉まった瞬間、屋敷内は淡い闇に飲み込まれ、懐中電灯が必要になった。闇に目が慣れるまで待つか、それとも出直そうかと悩んでいると正面大階段の裏側にボヤツと黄色い明かりが灯った。

(火の玉、鬼火、きつね火……?)

非現実的なことばかり浮かんでくる。足が勝手に動いて後退りして背中をドアに引っ付けた。怯えるだけの時間がとても長く感じた。

「どなたですか？」

年老いた男の声が黄色い明かりの方向から聞こえてくる。

「す、すいません」

「勝手に入られては困ります」

明らかに声には不快感がこもっていた。

茄子形のガラス筒、銅版の笠がピカピカに磨かれている古風なランプに照らされて声の主が姿を現した。頬骨が異様に突き出て目が細く狡猾な狐の陰影を添えた背の低い老人。モーニングコートを着て黒とグレーの縞柄のスポンをはいている。

「道に迷ってしまっ……」

おれは場当たりに嘘をついた。

「ここには電話などの通信手段はございません。残念ですがお引取り下さい」

あまりにも冷たい態度で対応されたので、おれは呆気にとられた。山奥で迷った人間をあっさり帰してしまう無神経さに驚いた。嘘をついていることを見破られてしまったとは思えない。

「なにか飲み物か食べ物でもらえますか？」

おれがすぎるような目をしてお願いしても逆効果だったようでモーニングを着た老人は表情を硬くして言った。

「三ヶ月に一度だけ食料を配達してもらっているのですが、他人様にお分けする量はございませんのでどうかご了解下さい」

一見丁寧な言い回しだが、言葉にはさっさと出て行ってくれとい

う意味も含まれていた。

「少しでもいいですから……」

「お引取り下さい！正面玄関から轍に沿って歩いて行けばそのうち舗装された道路に出て車や人と出会えます」

老人は語気を強め、迷惑していることをあからさまにした。

「どうした？ジイ？」

正面の大階段から誰かが下りてくる。上半身に影がかかっているために顔がよく見えない。

「申し訳ありません。大声を出してはしたくない真似をしてしまいました」

老人は階段から下りてくる人物に向かって深々と頭を下げた。

「珍しいね、お客様かい？」

声には張りがあり、老人より若いのは確實。

「お客様というわけでは……」

老人は言葉を濁した。言葉遣いからすると階段を下りてくる年齢の若い方に老人は多大な気配りをしている。

「すいません、山道に迷ってしまつて……黙つて屋敷に入つてしまいました」

おれも頭を下げた。

階段を下りてきたのは写真の青年。手のひらを手摺りにのせて階段を下りてくる。身長は170センチくらいで写真よりも大人っぽく感じる。撮影は数年前にされたものなのかもしれない。年齢は20代前半くらいで紺色のスーツの中に赤、緑、茶のチェック柄のベストを着込んでいる。

予想していないといえは嘘になるが、殺せと指示された人物が実際に目の前に現れると緊張してしまう。

“チャンスだ。撃て！”

頭蓋骨の中でそんな声が響いた。

いま青年を撃てば禿頭との契約を果たせる。だが、ジイという執事的な役割をしている老人に顔を見られてしまっている以上殺さなといけないだろう。おれは三人も殺すことになる。一度人を撃つたからといって次も殺れるかといえはそれは違う。駅で殺れたのは禿頭に後ろから銃を突きつけられ、瞬発的に撃ってしまったからだ。いまなら冷静な判断で最善の策を講じることができそうな気がする。青年を殺したからといってあの禿頭が妻と娘を素直に返すとは限らないし、青年に事実を話しても信じてもらえるかどうか。それに青年やジイが信用できる人物なのか観察して答えを出すまで下手な真似はしないほうがいい。

「登山している姿には見えないね」

青年に言われ、おれは自分が作業服を着ていることの不利な状況に気づいた。手ぶらで山奥に迷い込んだ理屈が思いつかない。

「山を管理する仕事をしている最中にクマに追いかけてここに逃げてきた……そんなところかな」

青年はニッコリ笑っておれが出せないでいる答えを勝手に見出し
てくれた。

「そんな……ところです」

歯切れ悪く青年の答えに曖昧に同意した。

「そんなこと、信じられません。この男、怪しいですよ」
ジイとやらが一步踏み出して意見する。

「外は霧で出歩くのは危険だよ。いいじゃないか。世の中、助け合
いだよ」

青年の表情は穏やかだが、口調は命令形に近い。

「しかしですね……」

ジイは途中で言葉を切って反論するのをやめた。

「部屋を用意してあげなさい。そうだ、一階の角部屋がいいだろう」

「はい、すぐに準備します」

ジイは屋敷の右側の通路へ向かっていくと青年は頭を下げた。

「すみません。ジイの無礼な態度をお許し下さい」

「い、いえ、黙って屋敷に入った私が悪いんです」

おれも頭を下げて恐縮した。

「こんなところに住んでいると外の人間との接し方が苦手になって
しまつんです」

「なるほど」

「自分の家だと思ってゆっくり寛いでかまいませんからね。ジイが
呼びに来るまでここで待って下さい」

別れ際の笑顔は女性的で柔らかい。礼儀正しく誠実で突然押しか
けた他人に優しい。禿頭が言ったようなプロの殺し屋を始末でき
ると思えない。

青年は階段を上がっていく。おれは背中を目で追った。すると青
年が振り向いた。

「お名前は？」

「殿森といいます」

間を空けると偽名を検索していると思われるので本名を言ったが、
青年は名乗ろうとせず自己紹介してくれなかった。

おれは精一杯の愛想笑いをした。

青年は写真に写っていたような寂しそうな目はしていない。久し
振りに客人が来て喜んでいる顔だ。

禿頭が言った“狭い部屋に閉じ込められて暮らしている”という表現は間違っているようだ。少なくとも部屋敷内は自由に歩いて誰かに拘束されている様子は見受けられない。

しばらくするとジイがやって来た。

「まず、靴の泥をその玄関マットで落としていただけませんか」

「あ、すみません」

おれは慌てて靴底についている泥を拭き取った。

「どござ」

と言われ、後をついていく。

廊下の片側には同じ形状のドアが全部で八つ並んでいた。ジイはそのドアをひとつひとつ開けて自然光をとり入れた。暗かった廊下にささやかな明かりがもれてくる。ランプを必要としない環境をつくってくれたらしい。天気が良ければもっと明るくなるだろうが、歩くだけなら問題ない。

通りすぎる部屋は寸分の狂いなく窓やベッドなどの位置が同じ。昔、ホテルだったのは確かだ。禿頭が言ったことは真実と嘘が混在している。

廊下の突き当たりにある右側のドアを開け、ジイは部屋の中へ入っていく。

居間、寝室、浴室がひと続き揃った空間に洗面所のシンクなどの配管は見当たらず、開放感が漂う部屋。ついさっきおれが外から覗いた右隅の部屋だった。

「ここを使ってください。それとベッドに横になるならそこにあるガウンに着替えてもらえますか」

白くてふんわりとしたガウンがベッドの上に折りたたまれていた。お尻に泥がついた作業服で寝てほしくないらしい。

「すみません」

おれは礼を言った。そして質問を浴びせた。

「屋敷の中に部屋はいくつあるんですか？」

できるだけ答えやすいものから順番にぶつけていけば色々答えてもらえるかもしれない。本当はどうでもいいような質問から訊いた。

「全部で28です」

「すごいですね」

「昔、ホテルだったんです」

「そうなんですか。へえ、すごい。何人住んでいるんですか？」

「ご主人と私の2人だけです」

「それは寂しいですね」

「もう慣れました」

ジイは冷たくあしらって会話を打ち切りたい様子。こんな山奥に二人きりで住んでいる青年とジイの関係を詳しく知りたかったが、これ以上根掘り葉掘り訊いてしまうのは失礼にあたる。お世話になるわけだし、嫌な印象を持たれたくない。

「それでは失礼します」

おれが僅かに押し黙った隙を縫ってジイは部屋から出ていった。

しかも背中を向けたままドアを閉めた。まだおれを本心から歓迎してくれてはいない。

まあ、しょうがないか。青年を殺そうとしているのは事実なのだから。青年はともかくジイにはかなり怪しい人物として警戒されている。殺しを実行するときに厄介な存在になりかねない。逆にこっちが命を狙われる可能性だってある。

逃げることも考えないと……窓を確かめた。外から侵入しようとしたときは鍵がかかって開かないと思っていた。錠を探したが見当

たらず、半円頂部が扇状で木枠の窓ガラスは嵌め殺しだった。開閉できない。いざとなればガラスを割って外に出るしかない。

幾分、霧が薄くなっていた。

ライフルが置いてある崖が見えるか頬を窓につけて確認しようとしたとき、ドアがノックされた。

窓から離れ「どうぞ」と声をかける。

ジイがワゴンを押しながら入ってきた。銀色の蓋を取り上げるとスライスされたフランスパンと湯気が立ちのぼる黄色い液体が皿に盛られていた。

「こんなものしか用意できませんが、どうぞ召し上がって下さい」おれに礼を言う隙をあたえず、ジイはさっさと部屋から出ていった。

手をつけていいものか迷った。毒が盛られているかもしれない。正直なところ腹は減っている。禿頭からは雑草でも食べてるとハンドブックを渡された。これから先、まともなものを食べられる保障はどこにもない。

まず、フランスパンを舌の先端で軽く舐めてみる。刺激してこなかった。スープの匂いを嗅ぎ、スプーンで掬って口に運んだ。ほんのりカボチャの味がする。粉末のインスタントかレトルトだろうがいまのおれにはご馳走だった。パンもスープもぺろりと平らげ、満腹感は達成できなかったが、英気を養うには十分だった。

食べているとき、妻や娘のことをすっかり忘れてしまっていた。命よりも大切なものがあるのに食欲がそれらをおっさり蹴散らした。二人が銃をつきつけられて怯えている姿を無理やり想像しないと目的を見失いそうだ。

このまま部屋に居ても霧が晴れたらジイに追い出されそうだ。屋敷内を探索して青年がプロの殺し屋を始末した証拠を掴めば心置きなくトリガーを引ける。

おれはドアを開け、廊下を確認した。

ジイの姿はない。つる草模様の絨毯が敷き詰められているから足音が聞こえず、どこから出てくるかわからない。ドアが開け放たれている残り七つの部屋からいきなりジイが現れたら心臓がとまってしまうかもしれない。

部屋の反対側の壁伝いに歩を進め、正面玄関を一気に駆け抜け、左側通路へ向かった。陽が射してきたためか廊下の先が見える。右側とは違い、ドアは並んでいなかった。かわりにおれが用意された部屋よりも大きなドアが廊下を塞いでいた。

真鍮のドアノブは軽く捻ることができた。モザイクの肖像画が描かれたタイル張りの床、大理石の壁にはめ込まれたマントルピース、脚にアンティークならではのネコ脚という文字通りネコの肉球に似せた細かい細工がしてある長方形のテーブルを小振りなシャンデリアが上から見下ろしていた。

入って気づいたことがある。この居間らしき部屋は暖かみが残っている。

(あそこか……)

マントルピースはおれの背丈よりも高く壁をくり抜き、この部屋を暖めるだけでは満足できないほどの大きさに造られている。マントルピースの飾り棚に写真立てがひとつだけ置かれていた。金色のフォトフレームに納まっているのは無精髭を生やした西洋人風の年老いた男。正面を向いておらず斜め左に視線を泳がせて右の横顔だ

けを撮らせている。

おれは振り向いた。床に張られているモザイクの肖像画は写真と同一人物。ホテルの創設者なのか自分の顔を床のタイルに残こすなんてかなり自己顕示力の強い人物だ。

しゃがんで山なりにたまっていて灰を触るとまだ温かった。昨晚、煙突から煙が出ていたのはここに違いない。夜、この部屋で食事することが日課になっているのかもしれない。マントルピースの横に傘立てのようなものがあり、その中から火バサミを取り出して灰の山を崩していく。カツンと固形のものにぶつかる音がしてそれを挟んで目の近くまで持つてくる。白くて細長い棒状のもので両方の先端が鋭利に裂けている。骨だ。でも、人間のものかどうかはわからない。牛や豚を吊るしてバーベキューをしていたかもしれない。他にも小さいサイズの骨をいくつか見つけた。ひとつだけポケットにしまつてあとは両手で灰の山を作り、元の状態になるべく戻した。

(二階に行つてみるか……)

危険ではあるが価値はある。見つかったとしても照れ笑いでごまかせば意外と許してくれるかもしれない。屋敷内をうろつくなど言われてないし、臆することはなにもない。

正面玄関へ向かい、階段を上った。踊り場を通過した上がり口で廊下は二手に分かれていたが左は5メートル先で行き止まり。突き当たりの壁に窓がひとつあるだけ。右側の廊下はまだ階段が続いていた。等間隔にランプが備えてありオレンジ色の灯りが間接照明の役割を果たしているから躓きはしないが、2、3段だけ上がる段差の少ない階段もあれば20段以上で一直線に上る梯子のような階段や洒落た螺旋階段もあつて歩くだけで結構な運動量が必要とされた。不体裁な階段からやっと開放されると、おれに用意された部屋と同

じドアが両側の壁に並んでいた。

片っ端から調べていくしかないかと思っていたら神様の恵みなのかどこからか声がもれてくる。

だいたいの方向はわかった。けれど、どの部屋で誰の声なのかまでは判別できない。しかし、幸運は続いた。もれてきた声が突然大きくなったからだ。

ドアにそつと耳を当てた。

「納得できません。どうして食事まで用意しないとイケないんですか？」

ジイが不快感を募らせて尋ねている。

「すでに食事を与えたあとでそんなこと言っても後の祭りだよ。どうしたんだ？いつものジイらしくないぞ」

青年がやさしく諭す。

「外の世界の人間を入れると、ろくなことが起こりませんから」

「確かにジイの言うことも一理あると思う。でも、もう一回くらい外の人間を信用してもいいんじゃないかな？」

「私は構わないのですが、サトシ様に危険が及ぶことが心配でならないのです」

「ジイの心遣いはとてもうれしいよ」

「あ、あり……がとう、ございます」

涙声で言葉にならない。青年の名前がサトシということと、二人の絆はおれが思っているよりもかなり深い。お金で雇い雇われるという単純な関係ではないらしい。

「お腹が空いたな」

「そうでした朝食がまだでしたね。リクエストがございましたら……」

おれはドアから耳を放した。注文を聞いたジイはすぐに部屋から

出てくるだろう。

引き返して身を隠すよりも部屋のどこかに入ることができれば時間にはかからない。しかしどの部屋も鍵がかかっている。一階は全部開いているのに……。

（畜生！）

心で罵り、焦る気持ちを振り払い必死にドアノブを回し続け、奥へと進んでいく。ハズレばかりだったが、ドアの上部に装飾的な大理石を埋め込み扉に幾何学的な意匠を施した2枚のドアが並ぶ部屋の鍵はかかっていなかった。単純に考えると他の部屋より倍広いということになる。スイート・ルームとして使っていたのかもしれない。

観音開きにドアが開くと本棚が部屋を支配していた。16帖ほどの部屋に天井ぎりぎりの高さの本棚が並び、びっしり隙間なく本を詰め込んでいる。全部で6列。本棚と本棚の間は大人が横歩きしてやっと通れるスペースが確保されているだけ。

本棚の陰に隠れてジイの足音が遠ざかるのを待つことにした。

「それではすぐに支度します」

という声がして、カス、カスと踵が絨毯を擦る音が聞こえてくる。気づかれていないという自負があったので冷静ではあったが、立ち止まらずに通り過ぎていく足音を耳にするとさすがに安堵のため息が出た。厨房はもつと奥にあるらしい。

本で思い出すのは禿頭の台詞だ。

“青年は生まれたときからあの屋敷に住んでいて、学校に行かず、親から書庫にある本の知識だけを植え付けられて育てられたそうだ”

本棚を見渡した。ハードカバーの分厚い本もあればカラフルな色使いで題名が印刷されている絵本から、製本されておらず1ページ

ずつ追加したり減らしたりする加除式資料もあつた。街の大きな図書館のように背表紙の下に『そ3』などの手書きの記号が付与してきちんと整理され、『系1』など古語もまじえている。年代物の本は多いが埃は被っていない。革製の豪華な装丁でずしりと重い国語辞典をそれとなく手にした。ページを捲っているとマジックで黒く塗り潰している箇所がある。眺めているとある規則性に気づいた。『加速』と『華族』の間の見出し語と解説部分が黒く塗り潰されている。

かそく……かぞく……の間に入るのは『家族』かな？
数ページ捲ってみる。

『仮定』と『過程』の間の見出し語も黒く塗られていた。“かてい”と“かてい”の間におさまる言葉は“かてい”しかない。だとすると残っている“かてい”は『家庭』しかなく、その他にも『親』『兄弟』『両親』『協調性』などが亡き者にされていた。わざわざ教える必要がないということなのか？それとも意図的に覚えさせないためのものか？後者だとすると、サトシという青年がこの部屋の本を読み、教育されたとしたら何か重要な部分が欠けた人間に成長してしまっているのではないだろうか？

(早くこの部屋から出よう！)

頭の中で警鐘が鳴った。

廊下の奥を進めばジイとかち合う可能性がある。必然的に自分の部屋に引き返すしか道はない。

サトシ青年の部屋の前を通った。すると「殿森さん」と呼び止められた。心臓が凍ったかと思った。

(どうしてわかったんだ？)

屋敷の中を探検していましたがという稚拙な言い訳しか思い浮かばない。頭が整理されていない状態で青年と会話してもあやふやなことを言っただけらしい存在だと証明するようなもの。

「殿森さん。どうしました？」

やさしく呼びかけてくる。これ以上待たせると立場を追い込むだけだ。

「……」

反省している子供のように頭を垂らし、押し黙って部屋に入った。何かを言ってから部屋に入るべきで、かなり無礼な態度をとってしまっていることに気づき、体が小さくなる。

「どうぞ、中へ入って」

笑顔で誘われた。サトシ青年は背凭れに赤いビロードが張られた椅子に座っていた。傍らの丸いテーブルにはコーヒークップが置いてあり湯気が立ち上っている。おれに用意された部屋にないものといえばテーブルの上にある奇妙な砂時計。透明なアクリルでできていると思われる筒の中に心臓の形にくり抜かれた部分が上下に連なっていて細い管で繋がり赤い砂を行き来させる作りになっている。大きさはジッポライターくらい。

「どうしてわかったんです？」

「ジイの歩くリズムと違いましたから。なにかうしろめたいことがあるのか殿森さんの足音はつま先だけを使って歩いているような気がしましたよ」

「あ、いえ、そのうー、勝手に歩き回ってすみません」

また年下に頭を下げてしまったが、不思議なことに屈辱的だとは思わない。立派な屋敷の主という品格がサトシ青年に貫禄をつけている。

「別に構いませんよ。部屋に閉じこもっていても退屈でしょうし、この屋敷に興味を抱かないほうが人としておかしい」

サトシ青年はソーサーを長い指を使って持ち上げ、コーヒを優

雅に啜った。

「この屋敷は誰が建てたんですか？」
当たり前障りない質問を投げかけた。

「アメリカ人の祖父が83年前に日本に来てここの土地が気に入りホテルを建設したらしいんです」

一階の居間らしき部屋で見たモザイクの肖像画、マントルピースの上にあった写真がサトシ青年の言う祖父だろうとおれは一人で推測して納得した。

「するとあなたはクォーターですか？」

「あなたも私もいまはアメリカ人だからクォーターじゃなくなりました」

サトシ青年が口からコーヒーカップを放して恥ずかしそうに笑う。
「そうですね」としか答えようがない。

「日本がアメリカの州になって得したことといえばメジャーに吸収されてレベルアップしたプロ野球くらいですかね」

「見たところテレビやラジオもないのにどうやって情報を得るんですか？」

「三ヶ月に一度、食料や日用品の類を配達してもらうときに三ヶ月分の新聞を一気に持ってきてもらいます。従って情報は三ヶ月遅れて入ってきます」

ジイも同じことを言っていた。俄かに信じられなかったが、三ヶ月に一度だけ配達に来る人以外に社会との接触はないらしい。正常な生活をしているとは思えない。

「いま世間を騒がしているニュースはなんですか？」

サトシ青年が興味津々に尋ねてくる。

「日本州では銃による凶悪犯罪を懸念して警官が職場放棄するケー

スが急増しているんです。そして知事が警察の民営化を進めると定例の記者会見で発表して大論争を巻き起こしています」

「質の悪い警官が増えても治安の安定は図れないですね」

「新聞だけでも一週間くらいおきに届けてもらったらどうです？不便じゃないですか？」

「ここに住んでいるかぎり最新の情報なんて必要ないんです。“暮らしは質素に”がぼくのモットーです」

『ぼくの』という響きでサトシ青年が年下だと認識できた。

「この建物を維持していくのは大変でしょうね」

「基礎がしっかりしてるから大きな修繕は必要ないのですが、最近雨漏りがひどくて。見てくださいこの手を」

サトシ青年は苦笑いを浮かべながら肉刺^{まめ}だらけの手を見せた。

「どうも大工仕事は苦手で…」

サトシ青年は頭を掻いた。

媚びているのか？

そんなことを思ってしまった。

職業柄だろうか？

おれが働いている会社の名前は『プロレタリアート金融』といって妻には外資系の証券会社に勤めていると嘘をついている。プロレタリアートとは無産階級という意味で反対語としてブルジョアジー（有産階級）がある。

妻はオフィス街一画のガラス張りのビルでおれがパソコンと睨めっこしていると思っっているかもしれない。おれが勤めている会社は庶民的な商店街脇の狭い路地を抜けた細長い雑居ビルの一室を借りている狭小会社。表の看板にはさも国から合法的に認められているような歌い文句を並べ顧客を呼び、窓口を訪れた人が融資額を述べ

るとおれの会社は「保証人がいないと難しいですね」と軽く拒否反応を示したあと「ただしその金額でしたら非公式契約ならお貸しすることが可能になるかもしれません」と甘い言葉で焦らす。もちろん顧客はためらうが実物の札束を見せておいしい言葉で誘導すると保証人不要でも借りられる『信用信託申請書』に記入してしまう。

『信用信託申請書』には裏があり、個人情報仲間が仲間の闇金会社に流れる仕組みになっていて引っ切り無しに闇金から勧誘の電話がかかってくることになる。うちの会社では「信用信託申請書」に記入すると法律で定められている年利をはるかに超える150パーセントで貸付けることが義務となっている。一度借りてしまつと借金の連鎖がとまらなくなる構図だ。

『プロレタリアート金融』の従業員数は6人でおれは取り立て部門専属。出社すると課長からリストをもらう。そのリストの名前と住所をもとに貸したお金を回収する。リストの多くは主婦。居留守を使われる可能性があるので子供を学校に送り出すときを狙って声をかける。せめてもの配慮として旦那さんが入社したのを見届けたあと取り立て開始。

「すみません、奥さん」

「こ、困ります」

主婦はキョロキョロしながら周りの目を気にする。

「困っているのはこっちです」

おれの腰くらいの高さから黄色い帽子を被った男の子がこの男誰ひとだろう?という表情で見上げる。

「あの、これから幼稚園の送迎用バスまでこの子を連れて行かないと……」

「いくらでも待ちますよ」

数分後にその主婦が駆け足で帰ってくると家の中へ通されるが、おもてなしは玄関まで。

「そろそろ払ってもらわないと困るんですが、返す気があるんですか？」

目を細くして厳しい顔をつくる。

「あと一週間待ってくれませんか？」

「それは無理です。いま返してくれないとこれから旦那さんの会社に押しかけて給料を前借りしてもらわないといけなくなる」

「夫には内緒にしてるんです」

涙ながらに訴える主婦の姿を見ておれは妥協案を提示する。

「三日間待ちましょう」

「ありがとうございます」

「用意できるんですか？」

「なんとかします」

「よろしくお願いしますよ。頼みますよ！」

きつい口調で念を押す。

「は……い」

涙声の返事を半信半疑で信じて家をあとにする。これで朝一の仕事は終了。リストにはあらかじめお金を借りている家族の素行調査が明記されている。

例えば…… 父親の則之は朝7時41分に家を出て、最寄り駅が習慣となっている。 駅で降りて株式会社Tまで徒歩で8分。

× 駅まで徒歩で27分。 駅の売店でスポーツ新聞を購入することが多く、いずれも徒歩3分圏内。 平均午後7時30分頃までが退社時間。 残業がないときは同僚と 駅前の『居酒屋庄治』で寄り道することがある。 妻の理子は午後4時に近所のスーパー『イセヤン』で夕食の買出しと日用品をそこで済ませる傾向にあり、趣味などもなく不定期に近所の主婦友達の家に遊びに行くだけで外出する

ことはほとんどない。

おれはメモを頼りに脅して回収率をできるだけ上げる。おれのやり方として外に出てきたときに声をかければ相手は世間体を気にして素直になることが多い。公園でベビーカーをつき合わせて井戸端会議を開いていた若い主婦の輪に入ったこともある。

「久し振りですね。Yさん」

陰険な目付きでターゲットの主婦に歩み寄るだけでほぼ勝負は決まる。「キヤツ」と短い悲鳴を上げる者。携帯で警察に連絡しようとする者。毛嫌いされる中、おれは一言だけターゲットに促す。

「そろそろお約束のお時間です」

その主婦は「保険会社の方なんです」と周りに言っただけで、輪から離れると近々返済することを即答する。ただ、輪の中に戻って会話を平常に戻すことは難しいだろう。深刻な話をしていることは遠目からでもわかるだろうし、如何わしいと思った話し好きの主婦が新たな噂話に花を咲かせることだろう。

闇金からお金を借りている者にとって一番怖いのは周囲に知られること。外に情報をもたらして追いつめていく会社のマニュアルは実に効果的だ。

それでも最近の主婦の中には一度返すと言っておきながら姿を消す者もいる。家に行くと言った旦那さんが出てきて申し訳ないといった表情で謝る。

「荷物をまとめて突然家を出て行ってしまったんです」

「奥さんの実家はどこですか？」

問い詰めれば「両親はすでに他界して故郷に実家はない」とか「彼女には肉親がないので帰るところなんかはないと思います」とお

決まりの嘘を並べる。こういう場合は借金していたことを旦那さんに話して身を隠していることが多い。

この仕事をしていると人を信じられなくなる。

『プロレタリアート金融』の顧客の90パーセントは主婦。家のローンや養育費が嵩んでうまくやりくりできなくなったとか、夫の安月給に責任を押し付けることができず、夫に黙って無担保、保証人不要の闇金にきてしまったと後悔しながらお金を借りる。体裁の良い苦労話を打ち明けられても信用してはならない。ブランド品の服やバッグ、深夜のテレビショッピングを見て高価な電化製品と100グラム1万円以上する健康食品を購入してカードローン地獄にはまったと正直に話してくれる者はいない。

一流企業に勤めていて返済可能な男でもうちの会社はお金を貸さないことにしている。払うという行為に怠惰して開き直り、返済を迫るとキレてしまって力づくで踏み倒そうとするからだ。主婦でさえ回収率が80パーセントなのに威勢の良い男が混ざると大変だ。銃が買えるようになってから身の危険を感じる事件もついに起きた。同じ地区にある同業者が30代のサラリーマンに取り立てをしている最中に撃たれて死んだ。

上司から「これからは護身用に銃を携帯しないとイケないな」と言われた。しかも出前で頼んだ日替わり弁当を食べながら。

おれ以外の同僚はその一言で不信感を覚えたかもしれない。撃つことを容認するということは撃たれることも覚悟しないとイケないということだ。自分の仕事が命を懸ける価値があるものなのかを計って辞めた奴もいる。

おれは同僚が辞表を出すまで会社を辞めるなんて選択肢があったことに気づきもしなかった。給料は一般の管理職よりも高く、マイ

ホームを28歳で建てられた。学歴が地元の高卒どまりでこれといった資格がないのに中流階級よりワンランク上の生活ができるのは人から嫌われる仕事をしているからだ。おれのような人間はリスクを背負わないと人並み以上の暮らしはできない。

妻と子供が人質になったことは想定外のリスクになった。いや、まだ取り返せるリスクのはず。明日からでも平穏な生活に戻れる可能性だつてある。

「殿森さん、どうかしましたか？」

サトシ青年の声で我に返った。

「あつ、いえ、ちよと、ポツッとしてしまつて………すみません」

「ご家族のことでも思い出されましたか？」

凶星だつたが、素直に答えるわけにはいかない。悟られたら全てが台無しになる。

「いえ、39歳でまだ独り身なんです」

おれは自分を卑下して嘘をついた。

「そうなんですか」

サトシ青年は意外だなという顔をして残念がる。

良い青年に見えるが人の本心なんてものはわからない。サトシ青年に優しさはあるのかもしれないが、きっと何かが欠落している。

サトシ青年が目線を外した隙を狙って腰を触り銃の位置を確認した。

もっと近づかないといけない。

できることなら一発で楽にさせてやりたい。頭を撃って脳ミソが飛び散ることは避けたい。やはり心臓を撃つのが理想。

壁にかかっていた風景画に興味ありげに近づくと。

「高そうな絵ですね」

「いいえ、遠い親戚の人が趣味で描いたものなんです」

遠い親戚とはうまく逃げられた。サトシ青年は自分から名乗らない理由としてあれこれせんさくされたくないのかもしれない。どんな方ですか？と訊かれればあまりよく知らないとか一度も会ったことがないと答えることができるし、近親者の名前を言ってしまったら色々なことを尋ねられる恐れがある。アメリカ人の祖父のことは訊いてしまった。会話を広げられない。

おれは視線を窓の方へ移した。

「霧が晴れましたね」

窓の外は緑色の景色が快復していた。ジイが居れば「道に迷うことはないし、お引取り下さい」と言われかねない。

できるだけ景色に惹かれる感じで窓に寄り、サトシ青年の背後に回った。隙だらけだ。あとは自分が肝を据えるだけ。これだけの至近距離なら背中から撃つても心臓を撃ち抜けるだろう。

ゆっくりと腰に手を回した。

・
・
・

銃口から白い煙が舞い上がる。

サトシ青年は上半身を激しくテーブルにぶつけ、コーヒーカップと心臓の形の砂時計が飛んだ。手で肩を揺さぶってみる。反応はない。本当に死んだのか？と思うほどサトシ青年の最期は呆気ない。

(これで妻と娘が帰ってくる！)

ライフルが置いてある崖の上で禿頭を待つて報告しないとイケない。でも殺した証拠を要求されたら……。

おれはサトシ青年の体を調べたがアクセサリーなど身につけているものはない。完璧な証拠とはいえないが、上着を脱がせて持って

いくことにした。まさか指を切り落として持っていくわけにもいきまい。そんな残酷なことはできない。

“人を殺しているのに？”

天からそんな声が聞こえたような気がした。

(やるしかないのか……)

指を差し出せばあの禿頭に強烈なインパクトをあたえることができる。でも、道具がない。ドレッサーの引き出しをひっくり返してもカッターなどの刃物は見付からなかった。

手首を何発か撃てば千切れるかもしれないなんて残虐行為がいつも簡単に浮かんでくる。人を殺すとんでもできてしまいそうで怖くなってきた。

逃げるように部屋を出た。

パンツ……という音が背後から聞こえたのと同時に背中が焼けるように熱くなり、体の力が急激に抜けていく。

「手厚く持て成してやってるのになんて薄情な奴だ」

体が動かないので眼球だけを使って後ろを見ると、ジイが銃口を突き出しながら近寄ってくる。

「つ、つ妻と娘がゆ、ゆう……」

言葉がうまく出ないし、声も小さかったようで、ジイはおれが持っていた銃を遠くへ蹴飛ばし、靴の踵を手の甲に押し付ける。悲鳴が出ないほどおれの弱体化は激しい。

「えっ、もう死んじゃった？」

サトシ青年が愉快そうに尋ねる声。

「虫の息です」

「撃たれる瞬間を見たかったのに残念」

と言いながらおれの顔を覗くサトシ青年の表情は満足げ。右胸の辺りから血がぼたぼたと流れ落ちている。

撃たれた人間が平然としているなんて……意識が混濁して視界もグニヤと渦を巻いた。

「ところで殿森さん、お食事はすまされましたか？」

顔だけを回転させてサトシ青年が尋ねてきた。

「ええ、すいません食事まで用意してもらって」

銃を掴もうとしていた右手をさりげなく後頭部に回して照れ笑いを浮かべた。連想は最悪な状況を演出しておれの決意を鈍らせた。

（一体どうしたらいいんだ！）

心の中で叫んでも答えは出ない。人を殺すということはそれだけ重みがあるということなのか。いっそのこと銃で脅して禿頭が崖の上までくるまで待つてあとを任せればとも考えたが、あの禿頭がおれにとどめを刺させることだって十分にありえる。

（どのみち殺さないといけないのか……）

会話が途切れるとサトシ青年は人懐っこい笑顔で間を埋めた。

（やっぱり殺せない！）

そう決断したとき、ドアをノックしてジイがワゴンを押しながら部屋に入ってきた。

おれと視線が合うと急に表情を硬くした。

「では、失礼します」

おれは急ぎ足で部屋を辞去した。

複雑な階段を上り下りしているときに後ろからジイが付いてきているのを知りながら無視した。しかし、正面玄関の階段を下りようとするときたまりかねてジイが呼び止めた。

「屋敷の中をウロチヨロさされては困ります!」

ウロチヨロという言葉が引つかかった。落ち着きなく台所で悪さをするネズミ程度としかおれを見ていない言いくさだ。

「この主からはお許しをもらった」

怒りを抑え、ちょっと抵抗してみるとジイは苦虫をかみつぶしたような顔をして言った。

「もう霧は晴れました。さっさと帰って下さればこちらとしても助かります」

「それならサトシさんにお別れの挨拶をしてこないとな」

おれがジイの前を通り過ぎ、サトシ青年の部屋に引き返そうとすると作業服の上着を掴まれた。

「どうして名前を知っている?」

ジイは目を見開いて尋ねてくる。

「さっき話しているときにサトシさんから聞いたんだ」

じつと目の中を覗き込まれた。眼球が右往左往して嘘が暴かれるのを覚悟した。

「サトシ様は他人に名前を教えるようなことは絶対にしない。さては私との会話を盗み聞きしてましたね」

言い訳もできず、黙って屋敷から出て行こうとしたが、ジイが作業服から手を離そうとしない。

「は、離せ!」

おれはジイの腕を掴んで引き離そうとするが、思いのほか力が強く、両手で突いた。ジイは体勢を崩したが手だけは作業服から離さない。そのおかげでおれも引つ張られて道連れにされ、強かに頭を床にぶつけた。もうひとつ何かが床に当たる音がしてジイも頭を打ったのだらうと思ったが、腰に違和感が生じた。重みがなくなつて

いた。

「やつぱり……怪しい奴め！」

ジイが悔しがりながら吐き捨てた。

ズボンに挟んでいた銃がおれとジイの中間地点に落ちていた。

一瞬、視線が交差すると二人とも銃に飛びついた。早かったのはおれの方。重要なところで若さが勝った。転がってジイとの距離を空けて片膝立ちで銃を構えた。

「大人しくすればなにもしない。両手を頭の上のせてゆっくり立つんだ」

ジイはなにも言わず、おれの指示に従った。

「これからサトシさんのところに行って事情を説明したい」

ジイは頷いた。表情は冷静だ。

「聞きたいことがある。一階の居間のような部屋のマンツルピースでなにを燃やしていた？」

「居間？」

ジイは斜め上に視線を向けた。猿芝居にしか見えない。

「おれに用意された部屋の反対側の廊下にある突き当たりの大きな部屋だ」

「あそこは客間です」

「燃やしていたものはなんだ？」

詰問口調で尋ねた。

「暖炉で燃やすのは薪と相場が決まっている」

「まだ、冬じゃないぞ」

「こんな山奥だと朝晩は冷えるんです」

ジイが片方の口角を曲げて笑いをこらえながら言った。

「これを灰の中から見付けた」

おれはポケットの中から骨を出して見せた。

「これは人間の骨じゃないのか？」

「いつだったか忘れましたがバーベキューをしたことがありましたから、そのときに焼いた牛の骨じゃないですかね」

あらかじめ用意していたかのような答えを淡々と述べた。でも、こちらには実際に目で見た証拠がある。

「昨日の夜。煙突から煙が出ていた。なにを燃やしたのか覚えていないとは言わせない」

「昨日？ということは屋敷を外から見張っていたんだな」

ジイは急に声を低くして、首筋の血管を隆々と浮き上がらせた。余計なことを口走ってしまったかもしれない。

これ以上ジイに訊いても埒が明かないと思い、骨をポケットにしまった。そのほんの僅かな隙をジイは見逃さなかった。玉碎覚悟で頭から突っ込んできた。トリガーを引くこともジイの頭を両手で受け止めることもできず、まともに鳩尾に喰らった。

「うっ……」

地獄の痛みが呼吸を困難にさせ、呻いて倒れた。ジイは馬乗りになつておれが銃を握っている手を床に何度も叩きつけた。利き腕じゃない左の拳でジイの右頬に一発見舞った。顔が横にブレたが、ジイは銃を奪うことに執着して叩きつける行為をやめない。

もう一発！

力を込めて振りかざした拳をジイは頭を後方へ逸らして避けた。

拳は空振りに終わったがジイの体重移動がおれの上半身を楽にさせ、腹筋の力で体を起こしてジイを突き飛ばした。

「あっ……」

悲鳴に近い短い声を二人とも上げた。

ジイは最期の足掻きとして両手を精一杯伸ばし、おれに助けを求めた。おれも左手を差し出したがジイの手を掴むことはできなかった。

正面大階段の最上段からジイは転げ落ち、その勢いは一階の正面玄関ドアにぶち当たるまで衰えなかった。首、腕、脚がありえない方向に曲がってジイは動かない。おれは深呼吸して気持ちを静めながら階段を下りていく。

また、人を殺してしまった。でも、おれが悪いんじゃない。ジイが追いかけてこなければ揉めることもなかった。銃を奪おうとしなければこんなことにならなかった。

自分に非がないんだと心に打ち込み、動揺をかき消す。大事なものはこれから先の行動なのだ。サトシ青年の部屋に向いて謝って済む問題じゃない。銃で脅して妻と娘を取り戻そうとすれば新たな殺人を生み出す。サトシ青年に納得してもらうだけの説得力もおれにはない。人が死ぬところをもう目の前で見たくない。せめてレンズ越しならば耐えることができるかもしれない。

妙案が浮かんだ。突然天から降ってきた。世の中に神様なんて存在しないと思っていたが、おれは見捨てられていなかった。ジイの両足を肩にのせた。引きずって神様が待つ外の世界へとおれは出て行った。

無期限の標的

三日目 動かぬ標的

毎日様子を見にくると言った禿頭が昨日は来なかつたみたいだ。寝袋とライフルの配置、ゴミも散らかつてない。おれが屋敷に滞在していたときに訪れた形跡がない。邪魔者を一人消したとなれば望みは薄い。妻と娘のどちらかを解放してくれるかもしれない。できることなら会いたくない相手だが、今日ばかりは心のどこかで待ち侘びていた。

昨日とは違い屋敷までの視界は良好。雲ひとつない晴天で良い事が起こりそうな予感がする。

スコープを覗く。

(絶対に出てくる！)

サトシ青年が屋敷から外へ出てくるのを待つ。

さすがに眠気がおそつてきた。不眠不休で監視を続けている。腕時計を見ると針は午前8時52分を指していた。24時間以上寝ていないことになる。幸か不幸か昨日の夜は月明かりが途切れず一晩中見張ることができた。スコープから目を離れたのは水分補給のために葉についている朝露を吸った時間。

一瞬、瞼を閉じてしまった。頬にペチツと気合を入れる。

いくらなんでもそろそろ異変に気づくはず。世話をしてくれるジイがいなくなっていること、おれも突然姿を消したことに疑問を抱かないはずがない。そして……正面玄関から20メートル離れ、轍からやや横に逸れた場所にジイが倒れているのを発見すれば屋敷から飛び出してくるのは時間の問題だと思っていた。

ただ、サトシ青年の部屋はおれが窓から覗いたときを思い出すと正面玄関の反対側。だから、食事の用意がされないなど、いつもと違う変化に気づいてもらって部屋から出てくれないと外にいるジイに気づくことはない。不安要素はそれくらいだ。ジイが目に入ったら必ず心配して安否を確認するはず。そのチャンスを見逃さずに撃てばいいのだ。

(さあ、早く出て来い！)
心の中で誰かが叫んだ。

人を殺すことに自分は慣れてしまい蟻を足で潰すくらいの感覚になっっている。そんな自分を怖いと思う反面、ライフルのトリガーを引くときに躊躇したら妻と娘は助からないんだと強く念じて理性を追い払う二人の自分がいた。

四日目 新たな来客

とうとうサトシ青年は昨日外に出て来なかった。

ジイが行方不明になっっていることにとっくに気づいているはずで、捜すために外を見ていないということは考えられない。すでにおれに殺^やられたことを察知して警戒心が働き、外に出られないのかもしれない。これは持久戦になってきている。サトシ青年が銃でおれを狙っていないという保障はない。痺れを切らしてアクションを起せば負けだ。

疲れが表に出てきた。スコープを覗いている目の痛みで目覚めた。居眠りして傾いた頭の重さが右目に集中してしまったのだ。鏡で確かめたわけじゃないが目の回りにくつきり丸い痕がついて痣になっているかもしれない。

スコープを色々いじっているうちに取り外しに成功した。うつ伏せでいるよりも立ちながら覗いていけば居眠りすることもないだろう。木に隠れてジイの死体を見張ることにした。なかなか変化は起かない。腕時計を気にするが針がなかなか進まない。今日こそ外に出て来るはずだという確信が今日も出て来なかったらどうする？という不安へと変わる。出て来なかった場合の対策を考えないといけないのではと追い込まれている自分に気づく。

陽が頭上に差し掛かりかなり暖かくなってきた。時刻は12時36分。昼食時だ。サトシ青年が一人でご飯支度している光景は想像できない。窓という窓を繰り返しチェックするがサトシ青年の影さえも引つ掛からない。

(一体なにをしてるんだ！)

奇立ちが頂点に達したとき、異変が生じた。待ち望んでいたものではない。遠くから轍を踏みしめるように白い軽トラックがゆっくりに走ってくる。一本道だから目的地はサトシ青年が住む屋敷。

(配達……か?)

このままだとヤバい。ジイの死体が見付かったら警察に連絡されてしまう。遮蔽物のないところに放置してあるから目に止まるのは確実だ。

おれはスコープをライフルに装着して構えた。願わくは撃ちたくないが、部外者に知られるのはまずい。警察に通報されてしまったら妻と娘の利用価値はなくなったと禿頭は判断するだろう。警察に捕まるかもしれないと思った時点で人質を置き去りにして逃げてしまい、二人の監禁場所が永遠にわからないまま無情な結末を迎えるかもしれない。禿頭の言い方はサトシ青年の暗殺に失敗しても構わないというニュアンスが感じられたし、妻と娘が容赦なく殺されることだって考えられる。

弾が当たるかどうかは別問題として、また無駄な人殺しをしないといけなくなってきた。

軽トラックの運転手は『LSE』とロゴが入った帽子を深々と被っていたが、顎髭の剃り残しからすると男だ。『LSE』は日本州の運送会社と吸収合併して売り上げ一位に名乗り出た実在する会社だ。トラックのドアにも『LSE』の文字がプリントされている。

軽トラックとジイの死体までの距離が10メートルにも満たない距離に迫ったとき、おれはトリガーに指をかけた。車を降りて死体に近づくまで我慢するんだ。降りずに引き返すようだとタイヤを撃って足止めすればいい。

あれこれ悩んで数秒先のことを想像していると軽トラックはジイの死体の横を素通りした。

(気づかなかった?)

俄かに信じられない出来事を歓迎するわけにはいかない。それに正面玄関前のコンクリートにはジイを引きずったときの血の跡がくつきり残っている。

運転手は軽トラックを車寄せに停めるとダンボールを抱えた。足をちよつと見たが気にする素振りをみせず、ノックをして屋敷の中へ入っていった。乾燥した黒い染みを血と認識できなかったようだ。玄関のドアが開いた隙間からサトシ青年の姿は確認できなかった。スムーズな動きだったので外からのノックは広い屋敷の中では無力なことを知っていて荷物を玄関に置いてから大声で呼びかけ、あとは伝票にサインをもらっただけなのだろう。ただし今回はジイの代わりにサトシ青年が対応するはずだ。

そして、軽トラックの運転手は意外と早く出てきた。しかもサトシ青年を引き連れて出てきてくれた。ジイの死体がある方向を指差している。

いま撃てば禿頭との契約は成立する。サイレンサーだからサトシ青年が撃たれて倒れたとしても軽トラックの運転手はなにが起きたのかわからないだろう。けれどサトシ青年が怪しい存在として屋敷に短い間滞在していたおれの名前をすでに教えてしまったことも考えられる。

本名なんて教えるんじゃない。もう、撃つしかない。このチャンス逃すわけにはいかない。

サトシ青年が走る。現実には厳しい。移動する獲物をスコープの中

に収めることがこんなに難しいこととは思わなかった。やっと同心円の中心に捉えることができたのはサトシ青年がジイの亡骸に縋ったとき。とんでもないことをしてしまったと改めて思った。でも、おれの妻と娘の命にはかえられない。

同心円の中心の十字にサトシ青年を重ね、トリガーを引いた。
プシュツ……。

消音器が取り付けられた銃口から禿頭が撃ったときと同じように空気が抜ける音がした。しかし、サトシ青年に変わった様子は見られない。周囲の草木にも影響を及ぼした形跡はなく、弾丸が通過したことをサトシ青年は気づいていない。

(しつかり狙って撃つたのに外れた?)

銃に狂いが生じたのか、あるいは風などの影響を受けて弾が逸れたのか、素人のおれには原因がわからない。

残りが3発になってしまった。『LSE』の配達員を撃つことを考慮すると遊び弾は1発だけ。

トリガーを引く人差し指が汗で湿っていて作業服で拭いてから2発目を放った。

1発目と同じ光景が繰り返された。サトシ青年も周りの景色も無反応。

また、外してしまったと悔やみながらスコープを覗くと瞬間冷凍されたみたいに体が硬直した。サトシ青年がジイを見下ろしながら白い歯を見せたのだ。

なにがそんなに面白いのか。ジイの死体を見ているうちに気が動

転して狂ってしまったのか？

どうするもう一発撃つか……しかし、このまま撃ち続けても当たりそうもないし、弾を無駄にできない。ケチくさい迷いで頭を悩ませていると、サトシ青年と目が合った。咄嗟に体を伏せた。そんな馬鹿な！死んで天国へ逝つても撃たれたことがバレることはないのに場所まで特定してこつちを見るなんてことがありえるだろうか？

恐る恐るスコープに目を当てた。

サトシ青年は屋敷に戻ろうとしていた。ジイの死体は野原に放置されたままだ。サトシ青年は笑顔をまじえて『LSE』の配達員と言葉を交わすと肩を並べて屋敷に入った。

状況を把握しようとするれば頭が混乱する。目が合ったのは錯覚だったのか。二人の後ろ姿は親しげで仲むつまじく見えた。サトシ青年が白い歯を見せて笑った余裕はなんなのか。

体の芯からの震えは恐怖そのもの。この震えを武者震いに変換するにはどれくらいの時間が必要になるのか。妻と娘を救出するため2人も殺しているのに自分に危害が及ぶとなれば腰が引けてしまふ。情けない。おれは自分自身が一番かわいいらしい。

(こんなおれに誰がした？)

これまでおれは人を恨んで生きてきた。小学校四年生するとき、母親が車に撥ねられて死んだ。まだ幼かったおれは事態を飲み込めず、葬式で親戚の子供たちとはしゃいでいた。すると従兄弟のおじさんに首根っこを掴まれて母親の遺影が飾つてある祭壇の前に正座させられた。

「おまえのお母さんが死んだんだぞ！」

普段から直情径行が目立つそのおじさんと反りが合わなかったおれは憎まれ口を叩いた。

「そんなの、わかってるよ」

言ったあとすぐに張り手が飛んできた。反発して睨むとおじさんは再び腕を振り上げた。他の親戚の人たちがとめに入り、庇ってもらい、同情もしてもらい、その場はおさまった。おじさんは早々に葬式会場から消えた。そのとき、涙を流すのを我慢した。痛みで泣くのは癪しゃくだったし、おじさんの大人気ない行為を認めてしまうことになる。おれが泣いたのはずっとあとのことだった。

「おまえのお母さん。自殺したんだってな」

不意に友達から知らされた事実を素直に受け入れることなんてできなかつた。

「適当なことを言うな！」

ケンカになり、その友達にケガをさせるとクラスから相手にされなくなつた。思い切つて父親に問いただと顔が蒼白になつていくのを見て理解した。なぜ自殺したのかと追求はしなかつた。

真実を知るのが怖かつた。けれど兄弟のいないおれは家に一人で留守番しているときにかかつてきた電話ですべてを知つた。

「はい、殿森です」

「お父さんは居るか？」

粗暴な語り口。一言で怖い人だと思つた。

「仕事だよ」

父親は料亭で板前をしていると言われていた。定休日の木曜日以外に休みはなかつた。

「そんなはずないだろ。お父さんは仕事をクビになつたばかりだから」

「ぼく、知らないよ」

「本当にお父さんは家に居ないのか？」

「うん」

「だったらお父さんに言ってくれ。借金を早く返さないと家をもちろぞってな。それから天国のお母さんにもよろしくな」

怖い人から電話があったことを父親に伝えることなんてできなかつた。父親としての威厳をなくすだけだし、二人しかない家庭の雰囲気悪くするだけだ。葬式で親戚のおじさんがあれだけ怒った理由が少しだけ理解できたような気がする。

それから孤独で抜け殻のような生活が続いた。家に一人でいる時間が長くおれは電話が鳴るたびに耳を塞いで耐えた。父親は夜の12時を過ぎるまで帰ってこない。疲れきった表情ですぐに布団へ倒れ込むので母親が生きていたときよりも会話は激減。靴に付いている泥、ヘルメットが転がっているのを見ると板前の仕事を辞めたのは本当だった。

父親が一生懸命肉体労働しているのに家を手放して寒々としたアパートに引っ越さなければいけなくなった。ささくれた畳、風呂なしでトイレは共同。家財道具も質屋か粗大ゴミ行きにしたから四畳半でも狭いとは思わなかった。厳しい生活状況を呑み込めていたから不満はなかったが、引っ越して数日経ってからあることに気づき涙がとまらなくなった。生活臭がない。埃とカビの臭いしかなく家族3人で暮らしていたときのような温かいニオイはもう築けないんだと思ったら涙が出てきた。

正常な家庭環境を取り戻そうと思った。早く大人になって結婚して子供をつくり、お金を借りる側より貸す側に、そして葬式で叩かれたおじさん、周りの大人たちを恨むことを活力にして生きていくと決めた。捻くれているだろうか？周りに責任を押し付けすぎているだろうか？こんなおれにしたのはおれ自身なのか？恨み辛みをエネルギーにして生きていくことがそんなに悪いことだとは思わな

い。

サトシ青年とLSEの配達員は恐らく仲間ケルだろう。ライフルは残り2発だがリボルバーはまだ1発も使っていない。

暗くなるまで待とう。

少しでも有利な状況で踏み込まないといけない。

五日目 再度の潜入

昨日と同じく天気が良く、星空が広がっていた。午前12時を過ぎているから5日目に突入したことになる。屋敷は寝静まったように静寂が満ちていた。

二人は臆病者のおれを酒の肴に杯を酌み交わし、量が増え、グツスリ眠っているところかもしれない。

おれは崖を下りた。

いきなり撃ち合いになることも考えられる。銃を構え、焦ることなく這ってゆっくり屋敷に近づいた。裏へ回ったが、葉を大量に茂らせた木が密集して侵入経路を塞ぎ、遠回りしようとする所々肌色の地層がむき出して地盤が緩んでいる。足を滑らせて落ちてしまふと深い沢へ落ちて骨折だけでは済みそうもない。一階には勝手口もガラス窓もなかった。二階から上の構造は複雑で屋根が波打っている。木を登って窓から入るにはどの枝も細くて頼りなく、裏からの侵入は断念するしかない。

やや東側寄りの窓ガラスから淡い灯りがもれている。3日前、サトシ青年の部屋から外を見たときの景色と合致する位置だ。黒い人影が一瞬だけ窓を横切った。いままら一階に人がいない。

急いで正面玄関へ向かう。いまのうちに屋敷内に忍び込めば最初に潜入したときと同じように盗み聞きして情報を集めてから2人をどうするか決めることができる。

見つからずに2人の会話が探知可能な場所を迅速に探さないといけない。玄関のドアを開け、無警戒のまま屋敷内へ。大理石の床の部分に残っているジイの血は黒く変色してセラチン質となり、階段

のつる草模様の絨毯には黒い染みが点々と帯状に伸びていた。

「そろそろ来るころだと思ってました」

階段の上から楽しげに声をかけてきた。

おれは急いで銃を向けた。

サトシ青年が階段の踏み板に腰を落としておれを待ち構えていた。

「こっちは手ぶらですよ」

サトシ青年は両手を上げて立ち上がる。

「動くな！」

動揺で手が震え、片手だと安定性を欠き、しっかりと両手を添えて銃を支えた。

「そんなに興奮しないでください。怒りたいのはこっちのほうなんですから」

サトシ青年は目尻に皺をつくらずに笑った。明らかかな愛想笑いだった。

「事故だったんだ」

おれは言い訳半分、詫び半分、そして銃を構え、中途半端な感情を整理できないでいる。

「体が変な方向に曲がっていましたね。首の骨が折れたのが致命傷だったみたいですが、ジイが自分から躓いて階段から落ちたなんてことは考えられません。納得のいく説明をしてもらえませんか？」

サトシ青年は怪しく目を光らせながら訊いてきた。

「ジイが襲ってきたんだ」

「突き落としたんじゃないですか？」

「正当防衛だ」

「その銃は正当防衛のために持っているんですか？」
おれは答えることができなかった。この銃はサトシ青年を殺すための武器なのだから。

「そのとおり護身用さ……くらいの返答ができないとすれば、その他の目的を視野にいれて殿森さんと対峙しないといけないかな」
サトシ青年がじっとおれの目を見る。心の中が覗かれているように思わず目を逸らしてしまった。

「銃を渡してもらえませんか？」
サトシ青年が手を差し伸べるが、おれは首を横に振り拒絶した。

「まず凶器を捨ててもらわないと正常な話し合いはできません」
おれが二歩、三步後退すると、サトシ青年は階段を下りてくる。
「動くな！」
凄味を利かせてもサトシ青年は歩みを止めない。

「撃つぞ」
「どっぞ」
サトシ青年は手が届く距離まで詰めてきた。
「本当に撃つぞ！」
最終勧告だった。おれはためらいなくトリガーを引いた。追い詰められてかえって都合よく行動に踏み切れた。

撃ったあと銃声が屋敷内に響いた。硝煙で目の前が一瞬見えにくくなったがサトシ青年は涼しい顔で立っている。

「空砲ですね。試しにもう一発撃ってみますか？実弾は入ってないと思いますか？」

愕然とした。ライフルも手応えがなかった。禿頭が森に向かって試し撃ちしたときも発射音の他になにかを破壊した音は聞こえてこなかった。

「コケにされたのか……」

おれは頭の中に描いた禿頭の似顔絵に何発も実弾をぶち込んだ。

「まず、殿森さんのほうから洗いざらい話してもらえませんか？」

サトシ青年は腕を組み、おれが口を開くのを待っている。

おれはダラリと両腕を下げ、妻と娘が誘拐されたいままでの経緯いきわづを訥訥とつとつと説明した。

「禿頭か……なるほど」

自分が命を狙われているのを知ったにもかかわらず、サトシ青年は手で口を隠して密かに笑った。

「は、禿頭を知ってるのか？」

おれはせつついて訊く。

「私が想像している男とたぶん同一人物でしょうね」

「詳しく知りたい」

「先週の話なんですけど、遭難したという山登りの格好をした中年の男の人がやって来て休ましてあげたんですが、私を殺そうとしましてね」

「有能な人材を送って行方が掴めなくなったと禿頭が言っていた……」

おれは禿頭との会話を思い出していた。

「有能かどうかは別にして、ジイがナイフで刺してくれなかったら危ないところでした」

「禿頭はプロの殺し屋なのか？」

おれは眉を寄せて尋ねた。

「私も詳しくは知らないんですよ。ただ、山登りの格好をした男を始末したあと、禿頭がやって来て、私の命を狙わないかわりに多額

のお金を要求してきたんです。まだまだ刺客を送るぞ！つてね。もちろん一円も払うつもりはなかったんですが、どうやらジイが裏でお金を渡していたかもしれないんです」

「自分では手を汚したくないというわけか」

おれが利用されたのはお金のため。腸はらわたが煮え返る思いだ。

「笑いながらどこかで様子を見ているかもしれない」

「こちらから仕掛けても危険を冒すだけだから相手が踏み込んでくるところを待つしかないでしょうね」

サトシ青年は顎を手で擦りながら首を傾げ、いまいち自分の作戦に自信がない様子。

「禿頭はおまえが死ぬか行方不明になれば屋敷を爆破するとも言っていた」

「禿頭の言うことを一々真に受けることないですよ」

「仲間がいるのは事実だと思う」

おれが馱で後ろから銃を突きつけられているときに妻と娘がさらわれたのだから仲間がいるのは間違いない。

「殿森さんには申し訳ありませんけど、期限は無期限なわけだし気長に待つて相手の出方を見るしかありませんね。心配には及びませんよ。ジイの死体が表にあるからそのうち姿を現すでしょう」

ジイの亡骸を放置していた理由が禿頭をおびき出すためだったとしたら納得がいく。

「武器は？」

と、おれが尋ねるとサトシ青年は重そうに口を開いた。

「狩猟用の古いライフルならありますけど、古くて使えないと思います。暴発するかもしれない」

「隙を見て原始的な武器で戦うしかないか」

「そうですね」

「ところでLSEの配達員は？」

「私の部屋に居ます。実は彼も脅しに近いことを言ってきました。外でジイが死んでいて根拠はないが犯人に心当たりがあると。知りたければ手数料をよこせと言ってきたんです。そこで私は犯人を捕まえる協力をしてもらえれば手数料を弾むと約束したんです。ひとつ返事で承諾してくれました」

「誰がジイを殺したって言っていました？」

「禿頭でもみあげが長く眉毛が濃い男が恐らく殺したんだろうと言っていました。信用できない奴ですが、一人でも味方になってくれるのであれば少しは役に立つでしょう。あとで会わしてあげますよ」

しかし、その約束は反故にされた。おれは一階客間のマントルピースの中で待機してなんとか禿頭を客間に招き入れて隙をつくるからそこを狙ってほしいと言われた。サトシ青年はやけに自信満々だった。そのため、おれはLSEの配達員に挨拶することなく客間に閉じこもる破目になった。

また、待つことが仕事になってしまった。

サトシ青年と顔を合わすのは食事を持ってきてもらうときぐらい。パン、スナック菓子、カップラーメンなど調理の必要がないものを運んできてはすまなそうな顔をする。

「すみません。栄養失調になってしまいますね」

「いいえ、ご馳走ですよ」

笑える冗談に持ち込もうとしても会話は長続きしない。食べ物を咀嚼する音が客間に響き渡る。そして、サトシ青年はテーブルの上に残ったゴミを持って客間を出ていく。そんな面白味のない日課を重ねた。

無期限の標的

九日目 思惑

銀色の色線が窓を覆うと木の影が客間の窓ガラスを突き破って無断で侵入してきた。後に豪雨が屋敷を包み、雨は駆け足で水溜りを形成した。このまま降り続けると屋敷が湖面に浮かぶ幻想的な風景を醸し出してしまふ。夜、雨、雷、不吉なことが起こりそうな材料が揃った。緊張感を持続させないといけない。

予感は的中した。

物音がした。ここ数日間で聞いたことがない音だ。おれは反射的にマントルピースの中へ身を隠した。しかし、それきり何事も起こらない。雷などの自然現象以外の音は鳴りを潜めた。

気のせいだったのか？ ドアを開ける音が聞こえたような気がしたのだが……。

客間が一瞬だけ銀幕に包まれ、ゴロゴロゴロと地面を揺らす音が繰り返された。雷が近づいてきていると思った瞬間、サトシ青年の動揺する声が屋敷内に響き渡った。

「お、落ち着いて話しましょうよ」

使命感に従って客間を飛び出した。手持ちの武器は実弾が出ないリボルバーと骨を探し出したときにも使った火バサミ。重量感があるってなおかつ手ごろに持ち運べる武器はそんな物しかなく、なんとも心もとない。

正面玄関には誰もいなかった。ただ、床に濡れた足跡が残っている。誰かが屋敷に入り込んで間もない。階段に敷かれている絨毯にも泥がついていた。どうやら二階にいったようだ。

声は一階から聞こえた。サトシ青年は禿頭に追っかけられている

のだろうか？客間に連れ込んでくるはずがいきなり出ばなをくじかれたみたいだ。禿頭はサトシ青年を悪魔だ殺人鬼だと言いながらあまり恐れていないらしい。

屋敷内は危険な訪問者が侵入して張り詰めた空気が漂う。階段を上り、火バサミの端を両手で掴んで構える。長さは1メートルもないからかなりの至近距離で戦わないと勝機はない。禿頭はきつと銃を持っている。だからサトシ青年は手出しできず逃げたのだろう。

そして、一発の銃声が轟く。

廊下の奥で一体なにが起っているのか……。

複雑な階段を上る度、銃口が突如として現れ、撃たれるんじゃないかという恐怖と闘いながら歩みを進めたが、サトシ青年の部屋に辿り着くまでなにも起こらなかった。

おれは立ち止まり、唾を飲んだ。飲み込む唾液の量を制御しないと食道を通過するときの音が禿頭に聞こえてしまいそうな気がした。

サトシ青年の部屋に近づいた。話し声などいっさい聞こえてこない。が、火薬の臭いが鼻をくすぐった。

ドアノブをゆっくりと回す。『LSE』とロゴが入った帽子が絨毯の上で所在無げに主を待っていた。さらに目に飛び込んできたのはかつてサトシ青年を撃ち殺す場面をイメージしたテーブルの下に配達員が目を開けたまま倒れていた。口から血を流し、顔と腕にくっつかの打撲痕もある。

おやつ？と思った。

スコープを覗いたときは帽子を被っていたせいもあって顔がよく

見えなかったが、どこかで、しかも人生の重要な分岐点で会ったことがあるような……。

ガシャン…… ガラン……。

食器など激しく割れる音が廊下の奥から響いてきた。サトシ青年が教養を蓄積させる場として利用していた図書室の前を通り過ぎ、三段しかない短い階段を飛び越えると屋敷の果てに行き着いた。突き当たりのステンレス製スイングドアの存在は豪華な厨房に大勢のコックが忙しく出入りしていたホテル時代を連想させる。

「財産がたつぷりあるくせにケチケチするんじゃないやねえよ！」

禿頭の横暴な叫びが厨房から聞こえてきた。

「あなたに渡す理由や義理はない」

サトシ青年は冷静に答えている。

スイングドアには丸い窓が片側ずつ眼鏡のようになり抜かれ、そこから様子を窺った。

禿頭の背中越しにサトシ青年が立っていた。

案の定、銃を向けられている。

「いままで殺さないで生かしてやってきたのは誰のお陰だと思ってるんだ？」

禿頭が恩着せがましく尋ねた。

「刺客を2人も送り込んでおいてよくそんなことが言えますね」

「おれの仲間を殺したじゃねえか。それでご破算だ」

「あれは事故です。手厚く歓迎してご馳走を用意したら、あの方はひどく泥酔してマントルピースに突っ込んで焼け死んだのです」

「そんなこと信じられるか！」

禿頭がサトシ青年の言い訳を弾き飛ばした。

おれがこの屋敷に来る前に送り込んだ殺し屋はジイに始末され、

最終的に客間のマントルピースで焼かれたに違いない。亡骸の一部はポケットの中にある。禿頭に一生懸命仕事をしている物的証拠としていままで持っていたが必要なくなった。おれはポケットから骨を取り出して床に捨てた。

「まあいいさ。おまえを殺してからゆっくり遺産を探す。死んでもらおうか」

「屋敷にはありませんよ。パスワードとか指紋や瞳の虹彩の照合がクリアされないと預金が引き出せない海外の銀行に全財産を管理してもらっていますから」

説明を聞いた禿頭は腕を伸ばして銃口をサトシ青年の鼻先につけた。

「だったら銀行までドライブしようや」

禿頭は不適に笑った。

「嫌です」

「聞き分けがよくないな。ジイさんはそんなことなかったぜ」

「一度小遣いをもらった子供はまたおじいちゃんに小遣いをお強請りにくる」

サトシ青年は皮肉たつぷりに言葉をぶつけた。

「生意気な、この野郎！」

禿頭は銃でサトシ青年を三回殴った。片膝を床に付ける打撃を喰らったサトシ青年だったが、痛みを表情に出さず耐えている。

「徐々に苦しめてやる」

禿頭が銃口を下げた。どうやらサトシ青年の右足に狙いを定めたようだ。

そのとき、サトシ青年と目が合い、彼は小さく細かく一回だけ首を横に振った。サトシ青年はおれに救いを求めず“引き返せ”と合図を送ってきた。

おれはスイングドアに肩をぶつけ、火バサミを振りかざした。スイングドアが乱暴に開け放たれるただならぬ気配を察知した禿頭が体を捻って火バサミを避け、トリガーを引いた。

弾丸がおれの頬を掠めた。手で触ると血が付いた。作戦はほぼ成功だ。わざと音を立てて厨房に入ればサトシ青年への発砲は一時中断されるといふ読みは当たった。ただ、その後の作戦は未定。

「きさま！何人殺せば気が済むんだ！」

悪党が口走る言葉とは到底思えない一言をもらして禿頭はおれに銃口を向けた。

パンという乾いた銃声の後、おれは慌てて頭を下げて逃走する。2発目が撃たれ、スイングドアに穴が開く。厨房から転がるように逃げ、廊下に敷かれている絨毯に顔を擦って軽い火傷をした。

次々に弾丸が飛んでくる。おれはジグザグ走行でかわした。弾を後ろ向きで避ける運動能力が人間にあるわけがなく、どうやら禿頭の腕に問題があるようだ。

「畜生！」

禿頭の悔しがる声が後ろから聞こえる。

ただ、ずっと当たらないという確証もない。ひたすら姿勢を低くして走るしかない。絨毯の模様のつる草が足に絡んできそう目障りだった。

「妻と娘の命がどうなってもいいのか？」

禿頭のその声で脳の思考回路が停止した。

振り向くと禿頭は携帯電話の液晶パネルをおれに突き出した。おれはその映像を見て自発的に火バサミを捨てた。

「LIVE中継だ」

禿頭は微妙に口角を押し上げて密かに笑った。

画面には妻と娘が映っている。

「作戦は失敗だ。始末しろ」

禿頭は携帯に語りかけ、再び画面をおれに向けた。金髪の若い男が登場してきて銃身が極端に短いサブマシンガンを構えた。

「携帯の電波は通じないんじゃないのか？」

ちよつとでも禿頭のしようとしていることを遅らせて時間稼ぎのために質問した。

「嘘に決まってるだろ」

おれの思いは筒抜けだった。禿頭は短めに答えを切った。どうせなら2人より先に銃で撃つてほしかった。でも、禿頭がそれをしないことはわかっていた。禿頭はおれが嘆き悲しむ姿を見たいのだ。

「殺れ！」

指示された金髪の若者は戸惑う様子を少しも見せずにサブマシンガンを乱射した。

「やめろおー」

叫んだ刹那、妻と娘は白い煙に包まれ、体をバラバラにされた。

おれの全てが終わった。膝から落ちて絨毯の模様のつる草に紛れていく。このまま絨毯と同化して溶けてしまいたいと思った。

「おまえの落胆ぶりは異常だな」

禿頭は蔑む言葉を浴びせ、銃口をおれの顎に潜らせ頭を持ち上げた。

「これほど弾がもつたいたいなんて思ったことはないぜ」

おれの人生で最期に見るものが中年オヤジの卑屈な微笑みになるなんて惨めな人生だと思った。

「ところで、どうしておまえが選ばれて手の込んだ方法で苦しめられるのか思い当たる節はないか？」

唐突な質問に感じた。妻と娘を助けることに必死でなぜ自分が目を付けられ、こんなにも恨まれているかなんてことをあまり考えなかった。

「おまえ2年前に明和屋ストアという高級志向の食材を揃えている店で一人の主婦に声をかけたことを覚えてるか？」

身に覚えがなかった。おれはゆっくり首を横に振った。

「崎田静代という主婦がいつものように買い物をしていると肩を叩かれて闇金業者に借金を返せと言われたそうさ。どうだ？思い出したか？」

禿頭は具体的な話しを持ち出して記憶を蘇らせようとする。

「おれは人が見ている前で返済の催促を迫るのが仕事なんだ。いちいち覚えてない」

少し挑発的に言っただけだった。おれにはもう捨てるものがない。

「静代は外で話しましょうとお願いしてもその闇金業者は聞き入れず、旦那に言うぞと脅し、さらに借金の額を大声で叫んで言い触らしたそうさ。遠巻きに見ていた買物客の中には近所の人や知り合いもいて静代は精神的にまいって首を吊って自殺した」

ピンときた。崎田静代……うつかり者という言葉がぴったりの中年女性で扱いにくい人物だった。禿頭の言っていることは見当違いだ。声をかけてきたのはおれではなく、崎田静代の方だ。

「あら、久し振りね」

まるで昔の同級生に話しかけるように軽いノリで接してきた。

「崎田さん？お金は用意できましたか？」

おれは娘のためにケーキを買って帰ろうとガラスケースを覗いている最中だった。

「あらっ、まだ返していなかったかしら？」

崎田静代は口に手を当てて意外という顔をした。表情に嘘はなさ

そつに思えた。本気でお金を借りていたことを忘れていたようだ。でなければ声などかけてこない。

「いつも留守なんです。そろそろ返してもらわないと旦那さんに報告しないといけませんよ」

「いいわよ。言っても。夫には闇金から借金していることは言っていないから。夫は理解ある人格者なのよ」

崎田静代に脅しは通じなかった。やれやれと頭を掻いていると、崎田静代は“明後日には返すから心配しないで”と逆におれを励ました。

「忘れないでください。頼みますよ」

崎田静代は親指と人差し指で丸をつくり、OKサインを出して去っていった。自殺を考えている姿には見えなかったが、他人の心なうてわからない。本当は傷付いていたかもしれないし、日頃の生活に重圧を感じていたのかもしれない。おれには明るく振舞っておきながら禿頭には被害妄想を膨らませて嘘を言っている。これは借金を隠していたことの裏付けになる。ただ、おれと崎田静代の店での真実の出来事を説明したところで禿頭が信じるわけがない。

「すまなかつたな。奥さんなのか兄妹なのかは知らないが、崎田静代さんが死んだのはおれのせいさ。店でおれと会って数日後に自殺したんだからな」

おれは崎田静代の嘘を覆すどころか禿頭の怒りに油を注いだ。生きる力が欠如していた。

「素直だな」

禿頭はおれから二歩退いて銃を構えた。返り血を浴びるのが嫌なのだろう。

覚悟を決めて目を閉じようとしたとき、視野の隅にあるものが映った。余計なことをするなと心の中で悪態をついた。サトシ青年が

恐らく厨房から拝借した包丁を握って走ってくる。禿頭は気づいていない。警戒心ゼロ。凄腕の殺し屋かと思っていたがそうでもないらしい。さつき厨房から逃げたときも弾は当たらなかった。

おれは瞼を閉じて撃たれるのが先かサトシ青年が禿頭を刺すのが先なのかを運に任せた。

短くもなく決して長くもなかった人生が勝手に回想されてくる。おれが子供だった家族3人で暮らしていた時代とおれが築いた家族3人の一番幸せだった時期が対比するように代わる代わる瞼の裏に映像が焼き付いてくる。まだ、人生に未練が残っているのかもしれない。

ドン……とおれに誰かが体当たりしてきた。禿頭だった。おれにぶつかった禿頭は背中に包丁が刺さったまま絨毯の上に沈んでいく。「あ、危なかった……」

サトシ青年はたった一人の肉親とっていいジイを殺したおれを救って本気で安堵している。すまない気持ちで一杯になった。おれはサトシ青年の命と自分の命を天秤に掛けてしまった。

禿頭のポケットをひと通り調べ、さらに携帯電話のボタンを弄ったあと、サトシ青年は「なにもなしか……」と、ため息をついた。「携帯電話を使えるんですね？」

「世の中に携帯型端末を持って歩いている人はいないらしいので社会勉強のために説明書だけ取り寄せて読んでいただけます」

「読んだ説明書とその携帯の機種は違うでしょうか？よく操作できますね？」

「適当にボタンを押せばなんとかなりますよ」

賢い自分押し隠すようにサトシ青年は照れながら下を向いた。

そして、再び顔を上げたとき、引き締まった表情になっていた。

「殿森さんにお話ししたいことがありますのでそこまで付き合っ

くて値段は3240ドル。購入を即決したが当然持ち合わせがなかった。銀行でお金を引き出している間に誰かに先を越されるのではないかという不安を店員にぶつけた。すると店員は“予約済”の札をつけてお金を下ろしてくるまで待つてくれることを約束してくれた。その店員とLSEの配達員の顔は一致。とても感謝している。家族をつくるという目標が実現できたのだから。

生活は快適そのもの。それまで朝は目覚し時計をかけて自分で起きていたのに妻がおれの体を愛情豊かに揺すって起こしてくれる。

(あなた、起きて……)

おれは妻から手を離して布団に潜り目を擦りながら“おはよう”と挨拶する。そして、再び妻の後ろに回って(今日はパンでいいかしら?)と誰もいない布団に向かって尋ね、慌てて布団に戻り“イチゴジャムとブルーベリージャムを混ぜて塗ってくれ”とリクエストすると(ほんとに甘党なんだから)と可愛げのある捨て台詞を残し、おれは妻を抱えて寝室から出ていく。すでに娘は居間で朝食を食べていた。おれは妻を台所に立たせ食事の用意をさせる。パンを掴んだまま静止していた娘の背後にいつて(パパおはよう)と明るい声で挨拶する。おれは娘の向かい側に座り、“おはよう”と応じてからすぐに台所に向かって一時間早く起きて作った会社で食べるお昼の弁当と妻を担いで玄関に行く。下駄箱の上に弁当を置いて(これでよし)と妻の声で気合を入れ直す。台所に妻を戻し、ラムエッグとコーヒートをテーブルに載せ、朝刊を広げ、パンが焼きあがるの待ちながら娘と会話をする。“友美、今日はなにして遊ぶんだ?”と心の中で唱えると娘の友美は(教えない)と舌をペロツと出す。朝食を食べ終わると会社から帰ってくるまで2人はじっとしているようにと言いかせる。

一人三役、単純計算で家を出るまで三倍の時間がかかるが、生きがいのできたのだから苦にならない。

生活の変化が生きる糧となった矢先に妻と娘が誘拐されてしまった。

「さてよ……どうして電気街のAK地区で働いていた店員がこの屋敷に？しかもLSEの配達員としてっているんだ？単なる偶然では片付けられない。」

「この男は何者なんだ？」

おれは倒れているLSEの配達員を指差し、サトシ青年からの答えを待った。サトシ青年は腕組みをして死体を黙視する。そして語りはじめた。

「申しあげにくいことなのですが、このLSEの配達員はどうやら禿頭とグルらしいんです。あなたが二体の人形に異常に執着していることを知り、LSEで配達の仕事をするようになってこの屋敷の存在も知った。人間の人間を必要としない誘拐を禿頭と聞いていたらしく、自分たちは手を汚さずにあなたにだけ人殺しをさせて私から遺産を横取りする計画を企てたというわけです。先ほど禿頭を調べたところ身分証などを持っていなかった。携帯電話の発信履歴や着信履歴は消されていた。だから私の言っていることの裏付けはありません」

「禿頭の名前は崎田かもしれません」

どうして名字を知ることができたのかは敢えて教えなかった。自分の過去を喋ることになるし、サトシ青年も察してか訊いてくる気配がない。

「LSEの配達員は禿頭を裏切つて協力すると言ってくれましたが、色々質問して肝心なところになるとなにも話してくれませんでした。非協力的な態度をとるので拘束して吐かせるために試行錯誤しても良い返事がもらえなかつたんです。禿頭がきたときに人質に利用すると禿頭は容赦なくLSEの配達員を撃つてしまいました」

おれとLSEの配達員を会わせなかった理由がわかった。どんな状態で拘束してどのような試行錯誤をしたのかという疑問は顔などに打撲痕があつたことから質問は野暮のような気がする。

おれは屈んでLSEの配達員に顔を近づけた。“こいつが元凶なのか”と思うと悲しくもあり、情けなくて涙が出てきそうになった。「殿森さん。早くここから離れたほうがいいですよ」

サトシ青年がやさしくおれの肩に手をかける。

「帰る場所がない」

「そんなに落ち込まないでください。家に帰って新しい家族を見つけてください」

魂が抜けた状態のおれに向かってサトシ青年が励ましてくれた。

「元の生活に戻ることは難しい。知つてのとおりおれはすでに2人も殺している。後ろから銃を突きつけられて駅で初老の男性を殺したとき、禿頭が携帯で現場を撮影した。画像は世の中に出回り、容疑者として警察にマークされているかもしれない」

激励したのに反論されてしまったサトシ青年は宙に目をやって困っている様子。情状酌量の余地は十分にありますし、私が証言してあげますよ、という類の発言を期待していたが、それは叶わなかった。甘えすぎかもしれない。ただ、代わりに隠れ家を提供してくれた。

「この屋敷に住んでもらつても構いませんよ。食料は厨房と地下倉庫に保管してあるのでしばらくは不自由なく暮らせるはずですよ」

「い、いいんですか？」

突然の有難い申し出におれは戸惑った。

「私は外の世界を見たいと思つていますよ。外に放置されたジイの遺体を確認したときに屋敷から外へ出たのが記憶しているかぎり人生で指折り数えるしかないんです」

「えっ？」

サトシ青年は立派な大人で、若く見積もっても20歳は超えている。いままでの会話の中からインドア派の生活を送ってきたことは感じとれたが、まさか外に出たのが人生で数回しかないなんて俄かに信じがたい事実だ。

「外の世界は惨くて醜い。一步踏み出せば暗黒の世界へ引きずり込まれてしまう。理不尽な事故で死ぬこともあれば触れるだけで細胞が破壊されて死に至る恐ろしい感染症もある。なにより一番恐ろしいのは人間。指先の力だけでいとも簡単に人を殺せる武器を發明し、誰でも買えてしまう法律を作って殺し合いを助長する。人間は白と黒の二種類が存在します。肌の色ではなく、心に秘めた色のことで暗黒の世界では文字通り黒が占めるという。黒は無慈悲な人間であつて気分で人殺しをするときもある。そんな人間がウヨウヨいるんだと父親とジイにずっと言われ続けてきました。怖くて玄関のドアを開けることができなかった。昔は窓に板を打ち付けていたから空や木や草や土を百科事典の写真でしか見たことがなかった」

「生まれて初めて外に出ることになつたきつかけは？」

片寄つた知識で育てられたサトシ青年がどうやって殻をぶち破つたのか氣になつた。

「暗黒の世界に興味を抱いて父やジイに叱られることを覚悟して外に出たわけではないんですよ。ちよつとした弾みで外に出してしまつたんです。一階からトントン、トントンと正面玄関のドアを誰かがノックする音がしたんです。ジイを呼んでも応答がなくてしかたなく私が向かいました。どなたですか？と声をかけてもドアを叩くことをやめないのをおかしいなと思い、自然とドアを開けてしまつたんです。暗黒の世界なんて嘘だった。真っ白い陽の光に私は包まれました。眩しくてしばらく目を開けることができませんでしたが、視力

が回復すると私の足元には啄木鳥がいました。ドアが木製だったので穴を開けたくなったのかもしれませんが」

サトシ青年は窓枠に手をかけて真つ暗な外をぼんやりと見詰めた。「外の世界の美しさを隠していたジイを私は責めずにはいられなかった」

サトシ青年は真つ暗な窓を寂しそうな表情で眺めている。昼間の景色を想像しているのだろうか。

「邪魔者がいなくなったいまなら自由に外の世界へ飛び出せる。外の世界はコインのように表と裏がある。美しい緑に囲まれた公園もあれば有害な煙を吐き出す工場地帯もある。様々な価値観が交差する世界で人の心も同様に表と裏がある。私は知りたいんですよ。外の世界に住む人間の気持ちだね」

クルツとこつちを向いたサトシ青年は気分を切り替えたらしく、あどけない少年のような笑顔を見せた。そして、落ちていた二つの心臓が上下に並ぶ砂時計を拾ってズボンのポケットにだいじそうにしまった。

その後、おれとサトシ青年は二つの遺体を一階の客間まで運んで燃やした。人間が燃える臭いは強烈だった。炎が皮膚や内臓部分に到達すると茶褐色の液体が流れ、酸っぱさと下水道の臭いが混ざったような刺激臭となり鼻を襲った。血抜きをして内蔵を取ってから焼くべきだったかもしれないが、さすがに解剖医の真似はできない。臭いが気になり咳をしたり鼻を塞いだりと作業がはかどらない。火の加減の面倒を見てくれたのはサトシ青年で慣れた手つきで臭いもまったく気にしていない様子だったが一度だけ愚痴をこぼした。

「道具があれば……」

ジイの遺体はそのまま放置してほしいとサトシ青年に頼まれた。禿頭と同じ黒に染まった人間たちと一緒に焼いてしまうのは忍びないというのだ。薪をくべて外で火葬しようかと提案したがサ

トシ青年は首を振り、土をかけるだけでいいと言った。

そして、最後に言われたのが「この管理をお願いしますね」と
全てを託す言葉を残してサトシ青年は去っていった。

四十七日目 無期限の標的

サトシ青年が言ったとおり、食べることに関しては問題なく有意義にメニユーを選ぶことができた。地下室は一階の大階段の裏側に入口があつて洞窟のように薄暗い階段を下りると天井が低くレンガ壁の倉庫に辿り着いた。

6年間保存可能なペットボトルに入った水、レトルトやカップラーメン、非常食など日持ちする食料が大量に保管され、固形燃料などもありわざわざ厨房まで行く手間が省けた。また、奥の方には埃の被った瓶が棚に整然と並べられ、手で擦ってラベルを見ると年代物の高級ワインがおれに飲まれることを待ち望んでいた。生きていく楽しみがないおれは飲み食いする行為にひたすら没頭して時間を潰した。

禿頭が持っていた携帯電話を廊下で発見したとき、少し気持ちが高ぶった。サトシ青年がてつきり持っていたものと勘違いしていたおれは意外な置土産に感謝した。

携帯で現在の日付を確認した。

「あと3日で50日になるのか」

呑気な感想が独り言として出てきた。

あれこれ携帯電話をいじり、テレビ機能が付いていることを把握すると2.2インチの画面に釘付けになった。

ニュースに注目した。世間では惨忍な殺人事件が話題になって犠牲になったのは6人。被害者の性別、年齢、職業などはバラバラで無差別殺人という見方が強い。単独犯の作業らしく鋭利な刃物で背中を一突きされたあと、心臓をえぐり出して持ち去っている。幼い女の子も犠牲になっている。

“私は知りたいんですよ。外の世界に住む人間の気持ちかね”

サトシ青年の残した言葉が引つ掛かった。人間の気持ちと心臓……素直に解釈すれば符号するのではないか？それに心臓の形をした砂時計がたつたひとつの宝物であるかのように大切にポケットに入れていた。刃物を滑り込ませ、血の滴る心臓を取り出して真っ赤に染まった手で慎重に耳へ当てるサトシ青年の姿が目には浮かぶ。背中を刺すという犯行も禿頭を致死させたときのやり方と合致する。世間知らずの純粹さがボタンをかけ違い、狂気へと走らせているのではないだろうか？

警察がサトシ青年を捕まえることは難しいかもしれない。サトシ青年は義務教育を受けていないと思われ、戸籍などの公文書は存在しないだろう。証拠があつても警察のデータベースではヒットしない。幽霊のごとく現れては消える犯人を追いかけていることを警察は知らない。

喫緊きつきんの対策として警察に連絡だけはしておくことが筋かもしれない。屋敷内をくまなく調べてもサトシ青年の素性を明かす証拠になるものはなにひとつない。でも、禿頭からもらった顔写真は持っている。警察を屋敷に呼んで指紋を採取してもらえることだっできる。

おれの心はサトシ青年の犯行ではないかと気持ちが傾いている。このまま警察に加担していいものなのか？命を助けてもらい屋敷を提供してかくまってもらっている身分なのにあっさり裏切ろうとしている。そうになると、おれも2件の殺人を自供しないとイケなくなる。

携帯電話のボタンが押せない。数字が記入されているボタンには

触れるが指先に力が入らず、踏ん切りがつかない。

勇気を出せ！

銃を撃つときにくらべたら楽勝だと脳に叩き込む。意味もなくスクロールキーでアドレス帳をチエックすると『黒部聡』という名前がひとつだけ登録されていた。

聡……サトシ。

あのサトシ青年が携帯電話を持って禿頭と連絡を取り合っていた？

禿頭を殺したあとで携帯電話を色々と操作し、サトシ青年は「なにもなしか……」と、ため息をついた。発信履歴や履歴着信は消されていたと言っていたが、いま思えば禿頭にそんな余裕があったとは思えないし、自分が死ぬことを予想して仲間のために携帯のデータを消しておくほど後ろ向きに物事を考える奴でもない。

だが、サトシ青年には時間があった。焦ってもいなかった。自分のアドレスを消すことはできたはず。

わざと自分のアドレスだけを残して携帯電話を置いていったというのか？

液晶パネルに浮かぶ『黒部聡』という名前を見てみると電話をかける！かける！かけるんだ！と訴えているように思える。青い色のカーソルを『黒部聡』に合わせて発信キーを押した。耳に携帯を当てる。

一回目はプツ、プツ、プツ……という発信音のあとに話中音が鳴った。操作に不都合があった可能性があるのもう一度かけ直した。相手がすぐに出た。一回目と同じく電波が通じるまでの時間がやけに短く感じた。おれは自分から声をかけることを控えた。

「殿森さんですね」

間違いなくサトシ青年の声だった。

「はい」

「さっき話し中だったみたいですけどひょっとして私にかけてました？」

「はい」

「そろそろかけてくるかもしれないと思って電話を待ちわびていたのですが、なかなかかかってこないのので我慢しきれずにちょうど私も電話をかけたところだったんですよ。私たち気があうと思いませんか？」

無差別殺人犯に同意を求められても“はいそうですね”などと言えない。質問で返して返答を避けることにした。

「そろそろかけてくるかもしれないと思ったのはなぜですか？」

なぜか丁寧な言葉を使ってしまう自分に喝をいれたい気分になった。

「ニュースを見ればかけずにはいられなくなると思いましたから」

「各局ともに連続殺人事件をトップで扱っている」

「私が犯人です」

サトシ青年はあっさり自白した。

「どうして罪のない人たちを……」

「あなたのためですよ、殿森さん」

「どういう意味だ？」

思いがけない言葉に携帯をギョツと押し当てた。

「まず私が外の世界でしたことはあなたの家族を探すことでした。かなり苦労しましたよ。LSEの配達員から人形の特徴と商品名を聞き出すことには成功していたのですが、なかなか見つかりませんでした。リサイクルショップをあちこち回ってやっと二体の人形を買ったことができたんです」

「なんのためにそんなことを？」

「奪い取った心臓を取り付けて気持ち伝わる人形をプレゼントし

ようと思ひまして」

「なんだって！」

おれは声を張り上げた。

「やっぱり娘型の人形には小さな子供の汚れのない心臓がぴったりですね。ところで奥さんの人形に合う細胞の傷んでいない理想の心臓がまだ見つからないんです。禿頭の仲間が屋敷に押しかけてくるかもしれないし、心臓を取り出すには刃物で十分ですが、やはり銃がないと色々と不便なことがわかりました。これからは銃を使うという結論に至り、練習するために標的になつてくれませんか？」

サトシ青年は相手の意思などまったく尊重しない残酷な要求をしてきた。

「おれを殺せば人形をプレゼントできなくなるんじゃないのか？」

発言の食い違いを衝くささやかな抵抗を試みた。

「すぐに殺して楽しみを奪うことはしませんよ」

サトシ青年が前もって準備していた台詞を答えている気がした。

「結局は殺すということなんだろ」

「そうですね。私はあなたを信用していませんから。一度は私を殺そうとした人間を信用しろと言うのは無理がありますよね」

「君が信用しているものなんてこの世に存在するのかい？」

おれはサトシ青年を挑発した。

「私は心臓の鼓動しか信用しない」

サトシ青年の話しに付き合う限界を超えた。

「いま、何処にいる？」

「外に出ればわかります」

おれは玄関から外へ出た。

車寄せに忘れ去られていたLSEの軽トラックのフロントガラスが粉々に砕け散った。さらに前輪右側のタイヤが撃ち抜かれ、車体が斜めに傾く。

「殿森……さん……殿森さん」

携帯の受話口からサトシ青年が呼びかけてくる。

「初心者にしてはなかなかの腕でしょう？」

感想を尋ねられたが、おれは沈黙した。

「心配しないでください。しばらくは体のどこにも当てませんから

……ははは」

サトシ青年の笑いは乾いていた。

「君の気が済むまで逃げ続ける人生なんて懲り懲りだね」

おれは無期限の標的となることを拒否した。

サトシ青年がいる場所は予想がつく。きつと崖の上だ。LSEの軽トラックが撃たれたとき銃声はしなかった。無断で消音器付きのライフルを使ったようだ。

（屋敷の裏手から遠回りしてやる！）

背後で足元の地面が削れる音がしたが、屋敷の裏に回るまでなんとか当たらずにすんだ。

禿頭が用意したライフルには実弾はないはずだが、おれを練習の標的としてもあそぶと宣言したのだからそれなりの数の弾を調達してきた可能性がある。囷になって確認するのはあまりにもリスクが高い。それよりもサトシ青年の後ろから襲うほうがリスクを抑えられる。

木が密集した急勾配の沢を下りる途中で足を滑らせ、川に落つこちた。水量が少なく泥がクッションの役割を果たし、怪我は擦り傷程度。この水源は禿頭と休憩した苔むした森の川へと通じているのだろう。手で掬った水で顔についた泥を落とし、200メートル程下降してから階段状におれの身長を大きく超える岩が積み重なった側壁の前に立ち、わずかな凹凸に手と足を引っ掛けて登った。サトシ青年がいる崖の上からは尾根が両脇から挟んで視界になって見え

ていないはず。

腕力に任せていると汗で指がヌルツと滑り、ざらざらしていた垂直な岩肌が氷柱に感じる。出っ張りの少ないところはあまり体重をかけずに敏速に移動し、足と手に深い溝がフィットすればひと呼吸して体力を温存する。

頭を使っても蓄積された疲労がルート選びを迷わせる。浮石を掴まされ危うく滑落する危機を招いた。掴んでいた石は手から離れるとバウンドを繰り返して米粒ほどの大きさになった。岩壁を登りきることができたとき、陽が傾いて空はオレンジ色に染まりつつあった。

尾根上の最狭部から岩稜帯を下るとききれいな疎林帯へと出た。木と木の間を素早く走り回り隠れながらライフルが設置されている場所に近づく。

崖の上に黒い布で隆起したものを目視したとき、サトシ青年がうつ伏せの体勢でライフルを構えていると思った。

手頃な重さの木の枝を見つければ、逆さに持つと野球のバットのようになりになった。振り下ろせばとどく距離まで迫る。

ボス……黒い布は抵抗なく凹み、枝は地面に到達して折れた。

畏だ！と思ったときは、もう遅かった。頭を細くて硬いもので殴られ、おれは悶えながら倒れた。

「作戦が単純で警戒心もなさすぎ」

サトシ青年は笑いを堪えている。

「ぼくのせつかくの好意を受け入れないからこんな目に遭うんです

」よ

サトシ青年は鉄パイプを無造作に捨てた。

「さっさと殺せよ」

おれは鈍痛で顔をしかめながらも目の焦点をサトシ青年の顔面に合わせ、握り拳をつくった。

「殿森さんはもうこの世には必要のない人間ですよ」

サトシ青年は冷静な顔つきで相手の人格をバツサリ切り捨てることを平然と言つてのけると、スーツの内ポケットから銀色に光る細長い棒を取り出し、軽く振ると棒は縦に二分割され、メタルフィッシュで幅広のブレードを突き出した。湾曲の刃先を見せびらかす目的はひとつしかない。

「知ってるか一見必要のないものでも工夫すれば能力以上の力を発揮すること！」

おれは握り拳を振りかざし、握っていた土をサトシ青年の顔にぶつけた。

「幼稚なことを……」

サトシ青年は呆れたように顔についた土を払った。

一瞬の間……おれはズボンと腰の間に挟んでいた銃を抜き取り、銃身をサトシ青年の耳に突っ込んだ。

バタフライナイフで刺されるより先に銃声がサトシ青年の耳を通り過ぎた。

「ぐわっ……」

サトシ青年は血が流れている耳を両手で押さえながら後退りする。「どうだい？いくら空砲でも耳の中ならこたえるだろ？」

おれはサトシ青年が落としたバタフライナイフを拾い上げた。

答えを待たず、人を刺す目的だけで加工された鋭利な刃先をサトシ青年の心臓めがけて刺した。

無期限の標的

一 二日目 残されたモノ

歩いて帰ろうとは思わなかった。

偽りの家族でありながら楽しかった過去の生活は禿頭に破壊されてしまった。

これから先のことを考えようとすると脳の中が真っ白になる。なにも考えるなということなのか、それもと考えるという思考能力が破損したのだろうか？

(そんなことは……ないか……)

なにもすることがないのにいつちよまえに腹は減るし、当分は屋敷の中で過ごすことにした。

屋敷内で面白いものを見つけた。

大階段の裏側の地下倉庫に食料でないものを発見した。透明なビニール袋に粗めの黒い粒状のものが入っていた。『粒状カキ貝化石肥料』と印字され、総重量2キロの内容物のうち35パーセントがアルカリ資材と容量が明記されていた。これは花などの肥料として使うのが一般的だが、屋敷の周囲に花壇らしきものはなかった。したがって目的は他にある。アルカリ資材の用途で思いあたるのは

死体の腐敗を促進させ、死臭を抑える効果だ。

一体、どれだけの人間を殺つもりだったのか……いや、殺したのか……ひよつとするとこの屋敷の周辺は死体だらけなのかもしれない。埋めるところがなくなって暖炉で燃やすことにしたのだろうか？サトシ青年がおれに見せた手の肉刺は大工仕事のせいじゃない。

サトシ青年をジイの隣に埋めてやることにした。哀れんだわけでも信仰心が芽生えたからではなく、流れでそうなってしまった。ライフルを回収しようと崖の上に行ったとき、弾が見当たらなかった。撃ったのは3発。意外に値が張ったのか、それとも3発もあれば十

分だと思ったのか……。

サトシ青年を蹴飛ばして崖から落としても答えを吐かない。まさか自分達の死を予感して用意していたわけじゃないだろうなと思いつつアルカリ資材を撒いた。

久し振りに客間に足を運ぶとテーブルの上に一枚の便箋が残されていた。透明なアクリルの中に赤く浮かぶ心臓の形をした砂時計が便箋を飛ばさないようにペーパーウェイト代りに直立して支えている。

「殿森さんがこの紙を読むことになれば私はすでに死んでいるかもしれないですね。もう少し生きてみたかったです、しょうがありません。私は父親の固定概念だけで育てられました。だから何が正しくて何が間違っているのかよくわかりません。ただ、ひとつだけ父親から教えてもらったことで正しいんじゃないかと思うことがあります。それは人間が自殺をすると魂が地獄へいくということです。それを聞かされたとき、恐れおののきました。ところで殿森さんはこの屋敷以外に居場所がないでしょう。最後に良いニュースを教えてください。禿頭の部下はお金で雇われただけだと思つのであなたを復讐にすることはまずありえません。人形を銃で撃ち、ストレスを発散できるバイトに飛びつかない不良の若者はいません。ちなみに禿頭の仲間はLSEの配達員だけで孤独なのは皆同じですね。安心して私と同じ運命を屋敷で生き抜いてください。私には人の気持ちなんてわかりませんが、人形を家族の一員にしていた殿森さんにも人間の気持ちなんてわかりませんよね？あなたと私は似てますから、きつと屋敷での生活に馴染みますよ」

ボールペンで書かれた字はクセがなく、整っていた。しかし、その内容には多少の問題がある。細かい配慮の裏に自分の人生を悲観しながらもおれに押し付けている。

おれは肩で息をするくらい深いため息をもらしながら便箋を握

無期限の標的

了

り潰した。

一 二日目 残されたモノ（後書き）

最後まで読んでくれた方、ありがとうございます。主人公はこの後、どうしたのか？と疑問に思うかもしれませんが、それは読んでくれた人におまかせしたいと思います。もし、納得できない部分があれば感想を書き込んでください。必ずコメントを返信してお答えしたいと思います。他にホラーの長編で「狂犬病予防業務日誌」や短編では「近未来の肉屋」「付きまとう都市伝説」「人類、最後の言葉」など多数投稿しています。恋愛の短編でも「木漏れ日から見詰めて」という作品を投稿していますので読んでくれたらうれしいです。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5348c/>

無期限の標的

2009年3月24日10時39分発行